

大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

奈良県大和郡山市城内町

郡山城跡第7次

追手東隅櫓・多聞櫓跡発掘調査報告書

1993

大和郡山市教育委員会

大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

奈良県大和郡山市城内町

郡山城跡第7次

追手東隅櫓・多聞櫓跡発掘調査報告書

1 9 9 3

大和郡山市教育委員会

## 例　　言

- 文書は、郡山城跡第7次調査（追手東隅櫓・多聞櫓跡発掘調査）の正報告書である。
- 調査は、「明日のお城と城下町を考える会」が推進する城郭整備活用事業に伴う事前調査として実施した。
- 調査は、1984年1月23日～1984年3月8日にかけて実施した。
- 当時の調査体制は次の通りである。

(調査主体) 大和郡市教育委員会 教育長 堀口喬三

(調査事務) 大和郡市教育委員会 社会教育課 (課長 龍見靖雄)

(調査担当) 大和郡市教育委員会 技師 服部伊久男

(現地作業) ㈱浅沼組、東組

(調査補助員) 木寅孝次（大阪工業大学）、吉村克俊（近畿大学）、米田肇（大阪市立大学）

(調査指導) 奈良県教育委員会 (千賀久・東潮)

奈良県立橿原考古学研究所 (泉森皎、寺沢薰、佐藤良二)

株式会社構造計画研究所 (木村善行)、藤岡通夫 東京工業大学名誉教授

- 整理作業は1985年から開始し、下記の者が主に参加した（敬称略）。

米田肇、今西泰子、武田浩子、伊藤敬太郎、下大迫幹洋、本村充保、荒木浩司、竹内直子  
加藤洋子

- 本書の執筆、編集は服部伊久男が担当した。

- 本調査に係わる遺物・記録（図面・写真・スライド）は全て大和郡市教育委員会が保管している。大方の利用を望みたい。

## 本文目次

第1章 調査の契機と経過	1
第1節 調査の契機	1
第2節 調査の経過	3
第2章 郡山城の概要	5
第1節 郡山城の沿革	5
第2節 郡山城の現状	8
第3節 既往の調査	11
第3章 調査の成果	15
第1節 遺構	15
第2節 遺物	23
(1)瓦塊類 (A)軒丸瓦	23
(B)軒平瓦	38
(C)道具瓦・鏡・壇	46
(2)土器類	47
(3)石造物	50
第4章 総括	51

## 図目次

図1 大和郡山市の位置	1
図2 郡山城概略図（柳沢時代）	8
図3 郡山城の現況 ( $S = 1 : 1,500$ ) (折り込み)	9~10
図4 既往の調査地点	11
図5 第7次調査地位置図 ( $S = 1 : 20,000$ )	12
図6 調査地位置図 ( $S = 1 : 5,000$ )	15
図7 調査区概略図	15
図8 磚石番号と断面図の位置	16
図9 遺構平面図 ( $S = 1 : 80$ ) (折り込み)	17~18
図10 調査区土層断面図	19
図11 磚石部断面図 ( $S = 1 : 20$ )	20
図12 D区落込みSX-01 西壁断面図 ( $S = 1 : 20$ )	22

図13 オモダカの花と葉	24
図14 沢瀉文の細部名称	24
図15 軒丸瓦実測図1 (S=1:3)	26
図16 軒丸瓦実測図2 (S=1:3)	27
図17 軒丸瓦実測図3 (S=1:3)	28
図18 立葵文の細部名称	28
図19 軒丸瓦実測図4 (S=1:3)	29
図20 軒丸瓦実測図5 (S=1:3)	31
図21 軒丸瓦実測図6 (S=1:3)	33
図22 軒丸瓦実測図7 (S=1:3)	35
図23 軒丸瓦実測図8 (S=1:3)	36
図24 軒丸瓦実測図9 (S=1:3)	37
図25 頸部の形態分類	38
図26 軒平瓦実測図1 (S=1:3)	39
図27 軒平瓦実測図2 (S=1:3)	41
図28 軒平瓦実測図3 (S=1:3)	43
図29 道具瓦・鰐実測図	46
図30 塙実測図 (S=1:4)	47
図31 土器実測図1 (S=1:3)	47
図32 土器実測図2 (S=1:3)	48
図33 土器実測図3 (S=1:6)	49
図34 石造物実測図 (S=1:6)	50
図35 水木家所藏郡山城古図	52
図36 (闇柳沢文庫所藏郡山城古図(写)	52
図37 軒平瓦拓影 (S=1:3)	54
図38 復原建築設計図1 (平面図抜粋・S=1:650)	56
図39 復原建築設計図2 (東隅櫓立面図抜粋・S=1:650)	56
図40 復原建築設計図3 (東隅櫓立面図抜粋・S=1:650)	56
図41 復原建築設計図4 (多聞櫓立面図抜粋・S=1:650)	57
図42 復原建築設計図5 (多聞櫓立面図抜粋・S=1:650)	57

## 表 目 次

表1 歴代藩主と在藩年数	6
表2 郡山城跡調査地一覧	13
表3 軒丸瓦計測表1	44
表4 軒丸瓦計測表2	44
表5 軒平瓦計測表	45
表6 郡山城絵図一覧	53

## 写 真 目 次

写真1 復原された追手門	2
写真2 現場風景	4
写真3 板状五輪塔	50

## 図 版 目 次

図版1 郡山城跡空中写真（南上空から）	
図版2 郡山城跡空中写真（真上から、上が北）	
図版3 （上）調査地遠景（東から） （下）調査地前景（北から）	
図版4 （上）調査地前景（北から） （下）隅櫓全景（北西から）	
図版5 （上）隅櫓・続櫓全景（西から） （下）隅櫓東礎石列（北から）	
図版6 隅櫓東礎石列（北から）	
図版7 （上）隅櫓細景（北西から） （下）隅櫓西端部の状況（北から）	
図版8 （上）続櫓西端の集石（東から） （下）続櫓東面石垣の裏込め石（西から）	
図版9 （上）続櫓・多聞櫓の境界部（北から） （下）続櫓・多聞櫓の境界部（西から）	
図版10 続櫓・多聞櫓の境界部（東から）	

- 図版11 (上) 多聞櫓南半部 (B区) 全景 (北から)  
(下) 多聞櫓南半部 (B区) 近景 (北から)
- 図版12 (上) 多聞櫓の礎石 (北東から)  
(下) 多聞櫓北半部 (C区) 全景 (北から)
- 図版13 E区全景 (北から)
- 図版14 E区石組暗渠 (南から)
- 図版15 (上) H区全景 (北から)  
(下) 盛土の状況 (北東から)
- 図版16 沢瀉文軒丸瓦
- 図版17 沢瀉文・立葵文軒丸瓦
- 図版18 立葵文・九曜文・花菱文・複弁蓮華文軒丸瓦
- 図版19 右三巴文・左三巴文軒丸瓦
- 図版20 左三巴文軒丸瓦
- 図版21 軒平瓦
- 図版22 軒平瓦
- 図版23 軒平瓦
- 図版24 軒平瓦
- 図版25 軒丸瓦の接合痕
- 図版26 軒丸瓦・軒平瓦の接合痕
- 図版27 隅木先蓋瓦・舷・塙
- 図版28 土師皿・羽釜
- 図版29 烧塩壺・摺鉢
- 図版30 摺鉢

# 本文

# 第1章 調査の契機と経過

## 第1節 調査の契機

全国的な城郭復原の風潮に大和郡山市も無縁ではなかった。1980年に「明日のお城と城下町を考える会」という市民団体が結成され、行政と一緒に城跡の保存と活用を考える動きが急に活発となったのである。1983年には追手門（梅林門）を完成させたが、その時の建築許可申請書から当時の経過をうかがい知ることができる。すなわち、「大和郡山市青年団体協議会が主催する“親子まつり”は次代に生きる子ども達の健全育成を願って、親子の触れ合いの場として、昭和50年から推進されてきたものである。加盟14団体、会員350余名の青年層が中心になって行なわれてきたこのまつりは、年を追うごとに盛況さを増してきた。昭和53年一城と城下町一をテーマに実施された際に模擬天守閣と城門が造築されたが、これが大きな契機となって市民の間に城郭整備（復原）を望む声が、にわかに高まってきたものである。昭和55年7月青年団体協議会のナンバーを中心に市民有志も参画して、「明日のお城と城下町を考える会」を結成する運びとなった。この会員約450名を核に一般市民にも働きかけて郡山城の歴史や文化遺産としての城郭を今に生きる市民の生活にいかに結びつけ後世に継承すべきか。このことを目標にした学習、研修を重ねてきた。それとともに復原を市民総ぐるみで行うための啓発活動も展開することとなった。……」そして、各種のパンフレットやチラシを各戸に配布し、城郭復原の熱意を昂めていくこととなる。こうした動きの中で一定の復原計画が作成されていった。すなわち、城郭を3つのゾーンに分け段階的に整備を図ってゆこうとするものである。A・B・Cの3つのゾーンとその計画は次の通りである。

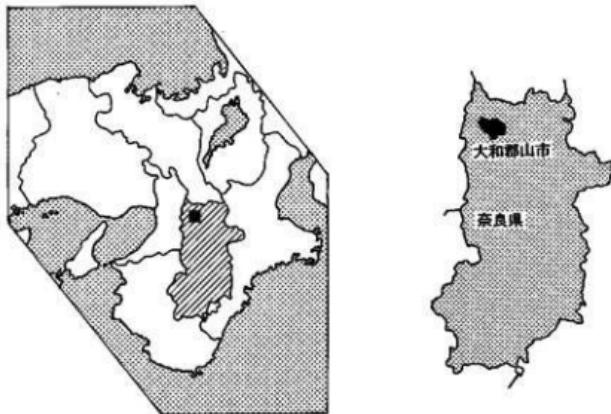


図1 大和郡山市の位置

Aゾーン 毘沙門曲輪を中心とする地域。池跡などをを利用して日本庭園に整備し、櫓や追手門の復原を行い、近鉄線、市道三ノ丸線などの幹線交通網からの視覚を考慮しながら城前の雰囲気を出しながら整備を進める。

Bゾーン 本丸部分に相当。極楽橋や極楽門、月見櫓など視覚的效果のある門櫓を復原する。

Cゾーン 陣甫部に相当、民家群の移転を図り、鉄門等の復原を行う。

これら3ゾーンの内、Aゾーンの復原が諸々の条件が整っていることで着手されることになり、1983年（昭和58年）にまで追手門が復原されたのである。追手門の建築概要について述べておこう。建築面積125.00m<sup>2</sup>、延床面積98.50m<sup>2</sup>、建築構造一木造入母家本瓦葺櫓門、高さ（最高）10.82mである。ちなみに建設費は約1億8千万円であった。さて、その後、再び機の熟成をみ、今回の調査の直接契機となった追手東隅櫓の復原が実行されることとなったのである。

さて、こうした復原計画が行われる場所は城郭中枢部であり、行政法上の様々な規制を受けていいる。すなわち、市街化区域、第三種風致地区、都市計画公園、県指定史跡等の区域に指定されているのであり、これらの規制に対して法的にクリアーしなければ建築に及ばないのは当然である。



写真1 復原された追手門

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、1984年1月23日に開始し、同年3月8日に終了した。調査に要した延日数は45日間、内、実働日数は37日間、調査面積は約300m<sup>2</sup>である。基本的に手振り作業によったが、多聞櫓部には厚さ1mほどの真砂土が入れられていたので、この盛土を小形重機を用いて搬出した。具体的な調査の進捗については以下の調査日誌を参照されたい。

### 調査日誌（1984年）

1月23日（月）	羽釜等多数出土。
資材搬入及び打合せ	2月3日（金）
1月24日（火）	多聞櫓部の精査、中央部の削平は著しいが北側の残存状況はよさそうである。
午前10時～地鎮祭を行う。11時～隅櫓部分の掘り下げを開始する。	2月4日（土）
1月25日（水）	内業、瓦整理を行う。
隅櫓の西側礎石列を検出	2月6日（月）
1月26日（木）	隅櫓部の精査
隅櫓部の掘り下げ続行。上部堆積層の除去。	2月7日（火）
1月27日（金）	C区掘進
統櫓部の精査、礎石はないが、根石状の集石を確認する。南面多聞櫓との接続部分の精査。	2月8日（水）
1月28日（土）	C区掘進
A区とB区の境目を掘り下げる。	2月9日（木）
1月30日（月）	C区精査、礎石の抜取痕が並ぶ。整地土内に瓦、土器片が含まれている。復弁蓮華文軒丸瓦出土（復古文様）
C区（多聞櫓）の掘り下げに入る。50cmの盛土があり、旧表土、整地土へと続く。整地土は隅櫓部と同じ黄色の粘質土、砂質土である。	2月10日（金）
1月31日（火）	B・C区掘下げ
本日大雪のため作業中止。	2月13日（月）
2月1日（水）	A・B境界部の精査。自然石（人頭大）が積み重なるように出土。
多聞部掘り下げ、旧表土上面でとめる。東面石垣の天場よりすでに20～30cm下っている。	2月14日（火）
2月2日（木）	A・B境界部から多量の瓦が出土。比較的ブライマリーな堆積が保っている。
多聞櫓部の掘進、及び隅櫓礎石の精査、西側の落込みはSX-01とする。土師器小皿・瓦・	2月16日（木）
	A区を西側へ拡張、南面多聞櫓の礎石を検出。

- 2月18日（土）  
除雪作業後、D区のSX-01掘り下げ。瓦が多い。
- 2月19日（日）  
D区SX-01掘り下げ。続櫓部への入口部分に相当か。瓦のはか、染付茶碗、磁器、摺鉢等出土。
- 2月20日（月）  
隅櫓部の精査。礎石抜取痕は検出できず。
- 2月22日（水）  
B・C区礎石抜取痕掘り下げ。比較的浅い皿状の抜取痕である。
- 2月24日（金）  
B・C区最終作業に入る。
- 2月25日（土）  
隅櫓部の礎石水洗後、写真撮影を行う。拡張区H・G区を設定、掘り下げ。雨落溝らしき石組を検出する。
- 2月27日（月）  
拡張トレンチ、E・F・G・H区の掘り下げ、
- 実測用の造り方を組む。
- 2月28日（火）  
実測（S=1/20）を開始する。
- 2月29日（水）  
部分写真撮影及び拡張区掘り下げ
- 3月1日（木）  
実測及びB・C区断面割り、整地土の状況がよく判る。砂層と粘質土の互層である。
- 3月2日（金）  
A区実測及び主要石垣を実測図に入れる。E区精査、石組暗渠を検出する。
- 3月3日（土）  
西壁断面実測、E区精掃及び写真撮影及びトラバース設定。
- 3月4日（日）  
東面石垣の実測、B・G区西断面実測。
- 3月5日（月）  
南面石垣実測及びレベル記入。E F区実測他。
- 3月6日（火）  
D区SX-01西断面実測、土層記入。
- 3月7日（水）  
断割調査
- 3月8日（木）  
保存部分に土糞を積み、最小限の埋戻し作業を行う。本日で調査終了、次の溝スケ遺跡の現場プレハブへ器材を移す。



写真2 現場風景

## 第2章 郡山城の概要

### 第1節 郡山城の沿革

中世末期、大和の霸権は筒井順慶と松永久秀の二者で争われていたが、1577年、織田信長の信貴山城責めで久秀は自害に及び、以後順慶が大和一円の支配者となる。信長の「城町」の政策に従い、筒井城を破却、新しく郡山城を築くこととなる。これが郡山城の始まりであるが、当初の城の位置や規模は判然としていない。順慶は「指出」にも従っているが、それによると筒井の知行は16万石ほどであったことが知れる。やがて信長の「国中一円筒井存知」、秀吉の「和州一圓一円知行」の認知によって名実ともに大和の霸者となり近世大和の幕が開く。しかし、順慶没後、秀吉の中世的勢力一掃の政策により筒井一党は伊賀へ国替えとなり、代って、1585年豊臣秀長が大和・和泉・紀伊三ヶ国の大守として郡山城に入部する。秀長は秀吉の命に従い厳しい施策を実施、刀狩や侍衆払いを行い多武峯僧徒や高野山・根来寺僧徒などの社寺勢力の減衰を図る。この秀長の治政に（1585年～1591年）郡山城の中心部がほぼ整ったとされている。『郡山城旧記』によれば、「本丸并二ノ丸堀ノ石垣普請等有之、天守ノ材木ヲ生駒山鬼取山ニテ伐大概ニ築ト云モ地震ニテ崩レ其後止ム」と記されている。現在の郭名でいう本丸・毘沙門曲輪・法印郭・キリン郭・縁郭・玄武郭・二ノ丸が完成していたと考えられている。また、この秀長の時代には城下町の発達を促すために種々の商工業保護政策がとられている。中世門前町である奈良を凋落させ、様々な商工業を育成した。城下町特有の魚塩町、堺町、総町、蘭町、茶町などが成立したのもこのころであり、同業者の集中が知られる。また、いわゆる「箱本十三町」の地主免除などをを行い、城下の経済進展を図った。その後の秀保も基本的にこうした政策を踏襲している。1595年、秀保が没し、増田長盛が20万石で入部する。長盛は郡山城を総構にするため大規模な河川替を行っている。世にいう「奈良口の川替え」である。秋篠川を直角に曲げ佐保川と結び、秋篠川の旧流路を外堀に利用したのである。外堀内側には土居を設け、大門を建て進入者を監視するなど、郡山城も盤石の構えを整えたといえよう。また、長盛は惣国検地を行い大和国全城の土地台帳を完成させ、所領と貢租負担を明確化し、藩財政の根固めを図る。やがて、1600年、関ヶ原の戦いで西軍に組した長盛も領地没収に至る。徳川方に引き渡された郡山城は取り壊しとなり、用材は伏見城に移され廃城となった。まず、大久保長安が郡山在番、奈良代官となる。その後、山口駿河守一筒井主殿が在番として入っている。1614年大阪冬の陣、1615年大阪夏の陣を経て豊臣家は一掃され、徳川家の政権が確立する。

まず、譜代の水野日向守勝成が郡山城を与えられ、1615年、6万石で入部する。約15年間廃城となっていたため城郭・城下町は壊滅状態であったので、幕府直轄の下、石垣や堀の修築に取りかかる。しかし、水野氏の在城はわずか3ヶ年で、1618年、備後国福山へ国替えとなつた。水野氏転封の後、1619年、譜代松平忠明が大阪城から転封され、12万200石を所領とした。かって伏見城に移

された城門を再度移築し、城郭の整備を進める。1639年、忠明は播磨国姫路城へ移封となり、代って、姫路城から本多政勝が15万石で入部する。この頃、町屋も多くなり、城下の家数も4,700軒を数え、人口も2万人に達したといわれている。本多家は「九六騒動」と呼ばれる跡目争いを経て、政長一忠国と続くが1679年、奥州福島へ移封、同年、明石城主松平信之が8万石で入部するが、在城7年にして下總国古河へ移る。その後、先の本多の譜にある本多忠平が12万石の知行で入部、第2次本多時代に入る。忠常一忠直一忠村一忠烈と継ぎ、約40年間に及んだが最後は本多家断絶となっている。1724年、柳沢吉里が15万石余で入部、以後、幕末、明治維新まで6代約150年間、藩政を司ることとなる。この間、郡山藩は最も安定した時期となり、畿内の雄藩として禁裏守護や南都火消・京都火消の重任を受けている。藩領は河内・近江・伊勢にも及んでいた。城郭もかなり整ったようであり、また、町家の隆盛も著しく商業も発達する。

以上、沿革の概略を記したが、城下の近世史を右頁にまとめておくので参考されたい（拠『大和郡山市・城跡及び旧城下町等の保存と活用のための構想策定調査'81』1981年）。

1580	筒 井	5
1585	豊 臣	10
1595	増 田	5
1600	※廃 城	15
1615	水 野	3
1618	松 平【第1次】	21
1639	本 多【第1次】	40
1679	松 平【第2次】	6
1685	本 多【第2次】	39
1724	柳 沢	144
1868	(明 治)	

表1 歴代藩主と在藩年数



## 第2節 郡山城の現状

西ノ京丘陵の南端に占地する郡山城は、内堀内の城郭中心部に限ればその遺存状態は良好である。ただ、町屋・武家屋敷地は近年の開発で大きく変貌し、外堀もほとんど埋めつくされている。

中心部は、公園、文教施設と若干の民家があるのみで、石垣や堀の遺存状況も良く往時を偲ばせる。内堀内は奈良県指定史跡となっている。追手門、東隅櫓、追手向櫓の復原建築も完成、整備活用が進んでいる。ただ、これも昆沙門郭の一角にとどまるものであり、全城の整備にはほど遠い。本丸には明治に建てられた柳沢神社があるが、景観にはそぐわない。二ノ丸跡には県立郡山高校が、縁郭には県立城内高校がある。近年、校舎や体育館の新設が進んでおり、早期移転など空言となりつつある。中堀はよく残っている。北側は空堀となっているが、西・南・東は溝面に水をたたえている。町家地帯では所々に古い建物が残るが、まとまって良好な町並を形成するところは少ない。

現状についてくどくどと説明してもはじまらないので、これぐらいにしておく。

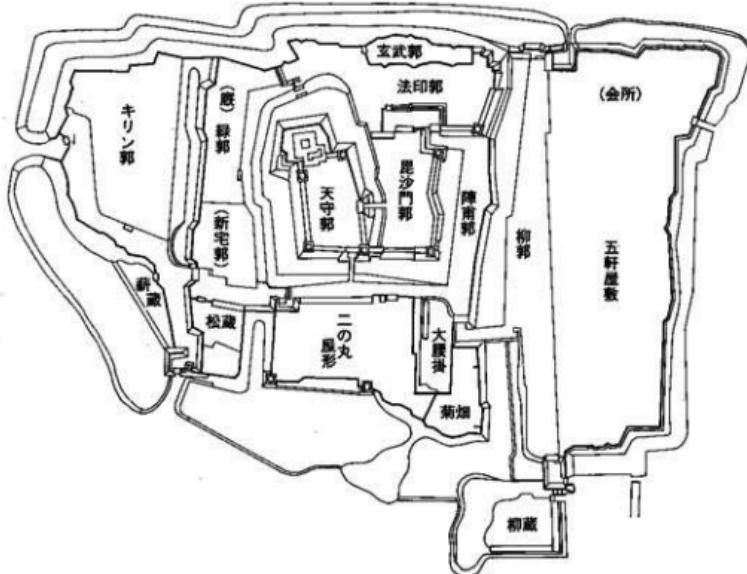


図2 郡山城概略図（柳沢時代）

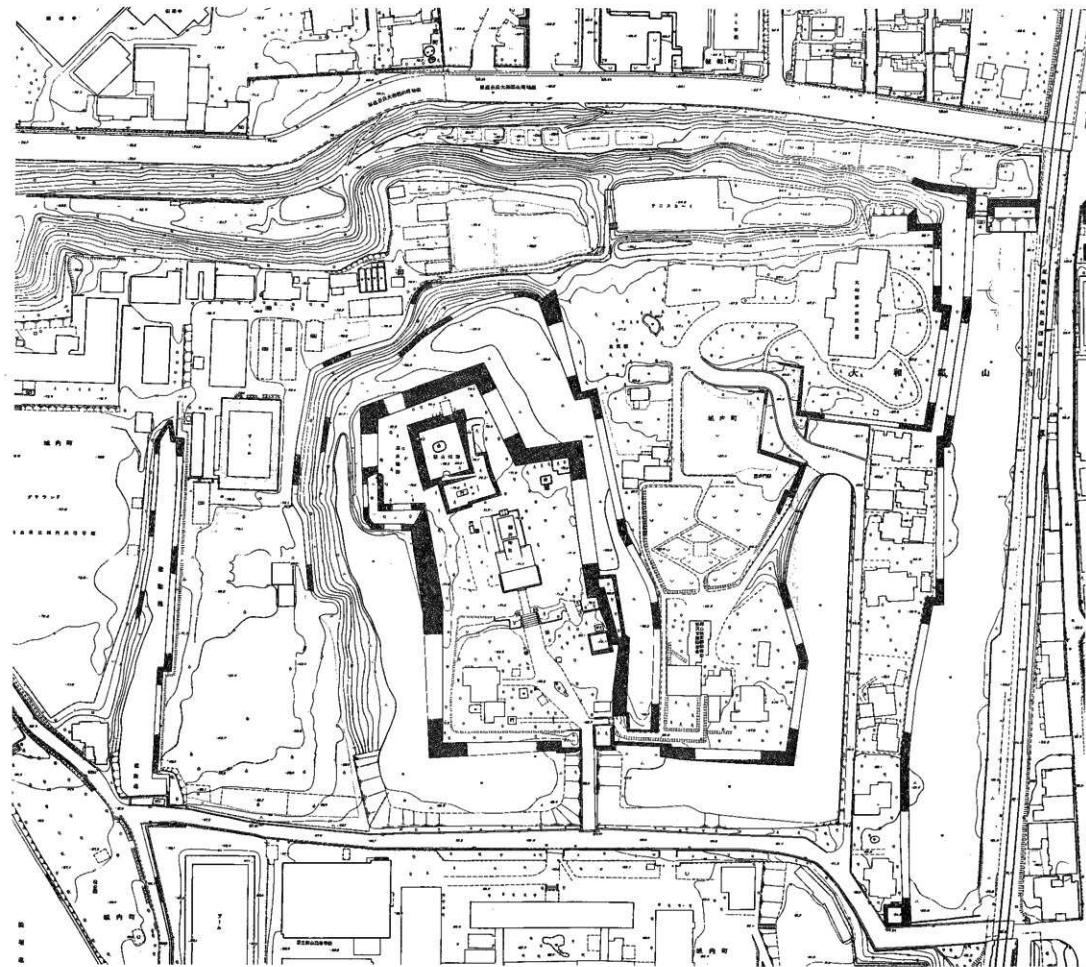


図3 郡山城の現況 (S = 1 : 1,500)

### 第3節 既往の調査

郡山城跡の調査は、外堀内を全て周知の遺跡として取り扱う中で、今まで鋭意実施されてきており、すでに32次に至っている。小規模な調査が多いが、比較的大きなものに限り概観しておきたい。

第1次調査は、県立城内高校のグランド造成に伴う調査で、曲輪内で初めての本格的調査である。本多時代と推定される建物、溝などが検出されている。第2・4次はマンション建設に伴う緊急調査。調査地は筒井時代の本丸推定地で、郡山城の三の丸に相当する重要な地域である。櫓状施設、櫓、土蔵などが検出され、明代末期の呉須赤絵が出土している。第3次調査は、追手門跡の調査である。城郭内の主要建物の初めての調査であった。門の礎石、番所の礎石、雨落溝などが検出されている。

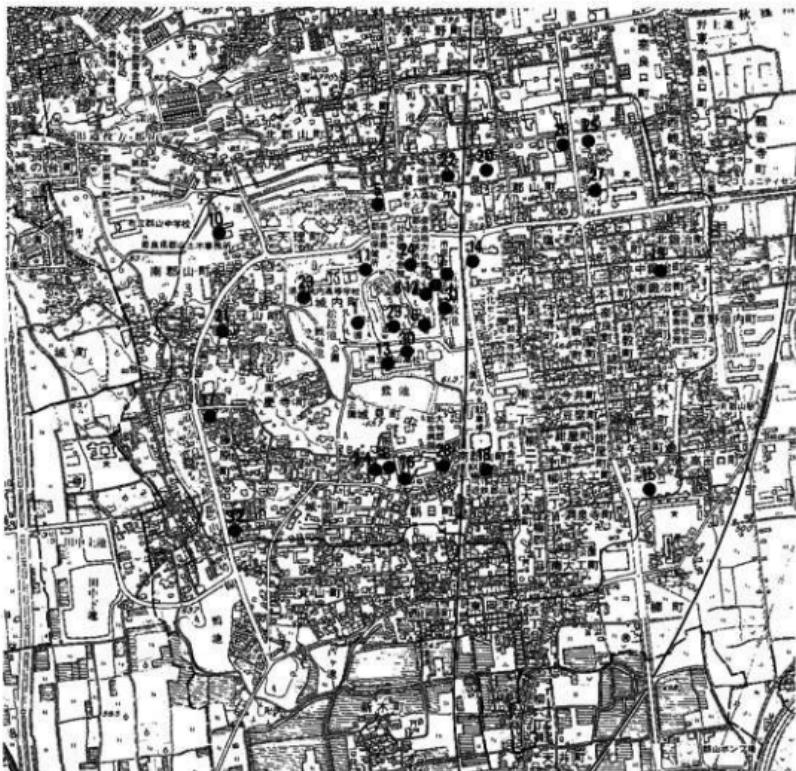


図4 既往の調査地点



図5 第7次調査地位置図 ( $S = 1 : 20,000$ )

(大和郡山市全図  $1 : 10,000$  使用)

整地土内に含まれていた瓦片から門建設の上限を柳沢氏入部後の江戸後半期としている。第9次調査は第2・4次調査地に東接する場所で実施された。近世の溝・土坑の他、奈良時代の掘立柱建物が検出されている。第11次は県立城内高校の校舎増築に伴う調査でキリン郭の南端、法印郭の西端、緑曲輪の北半分に当たる。石組溝などが検出されている。キリン郭のトレンチでは中世土器が大量に出土し、初期郡山城の手跡りを与えた。第12次は、追手向櫓の復原に伴う調査で、櫓礎石・埋甕などが検出されている。瓦の出土量が多く、また、軒丸瓦のほとんどが大ぶりの三巴文であるなど注目される事実がある。その他、二ノ丸跡で大きな調査が実施されている(第13・30次)。小規模なものはいすれも緊急調査で、あまり目立った成果はないようである。これまでの調査例をみると、やはり、城郭中枢部の調査で大きな成果を得ているように思われる。明治の初年に破却の憂目に合ったものの、その後は主に公共用地として利用される場合が多く、案外遺構の残りは良い。一方、町家・武家屋敷地における調査については、調査対象面積(開発面積)が狭いこと、また、そうした開発に対する行政の取り扱い方の不備、不足等の原因から、あるいは、明治以後もたびたび改変を受けつつ今日まで住居地として利用されていることも手伝って大きな成果を生んでいない。今後に期待されるところであろう。

以上、既往の調査を概観したが、近世郡山の歴史を考古学的に解明するにはまだまだ不十分な調査であることが知れる。今後は当市も積極的に取り組む必要に迫られているといえよう。県下唯一の城下町として、近世考古学に迫る役割の大きさを再認識し、鋭意調査を実施することが肝要と思える今日この頃ではある。

表2 郡山城跡調査地一覧（1992年3月時点）

調査 次数	調査地	暮名等	調査箇所	調査期間	調査者 面積m <sup>2</sup>	調査原因	文献
1	城内町257	幕界	郡山市立 歴史考古学研究所	1979.10.15 -10.27	200	県立城内高校グラウンド造成	1
2	朝日町516 1-1	三ノ丸	郡山市立 歴史考古学研究所	1982.10.12 -12.17	1000	マション建設	2
3	城内町253 1-1	追手門	郡山市立 歴史考古学研究所	1983.1.10 -2.22	700	追手門復元建設	3
4	朝日町516 1-1	三ノ丸	郡山市立 歴史考古学研究所	1983.6.12 -8.10	2200	マション建設（第2次の本調査）	4
5	城内町3-11	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1983.11.10 -11.12	120	市総合福祉施設	
6	城内町254- 1-1	尾山町	大和郡山市 教育委員会	1983.12.21 -12.26	13	御廟沢文庫取蔵庫改築	
7	城内町253- 1-1	追手馬鹿池	郡山市立 教育委員会	1984.1.23 -3.8	300	追手馬鹿池復原建設	5
8	城内町254- 1-1	追手馬鹿池	大和郡山市 教育委員会	1984.8.8 -8.25	100	追手馬鹿池復原建設（其の他の馬鹿池）	6
9	朝日町57	三ノ丸	郡山市立 歴史考古学研究所	1985.6.19 -7.24	500	マション建設	7
10	北越山町27 5-1	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1986.5	120	レストラン建設	
11	城内町2-45	佐印町・林	郡山市立 歴史考古学研究所	1986.6.20 -7.18	820	県立城内高校セミナーハウス建設	8
12	城内町254- 1-1	追手馬鹿池	大和郡山市 教育委員会	1986.6	400	追手馬鹿池復原建設	6
13	城内町1-26	二ノ丸屋形	郡山市立 歴史考古学研究所	1987.7.3 -8.5	258	県立郡山高校校舎増築	9
14	北越山町21 0	五軒屋形	大和郡山市 教育委員会	1987	100	都市計画路線ノ丸線建設	
15	南大工町	外堀	大和郡山市 教育委員会	1988.1.28	100	外堀公園造成	
16	朝日町1-62	三ノ丸	大和郡山市 教育委員会	1988.8.4 -8.24	180	大和郡山市総合病院改築	10
17	城内町4-18 20-1	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1988.10.3 -10.7	300	大和郡山市総合病院看護部宿舎	10
18	南越山町15 20-1-1	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1988.3.28	60	店舗テナントビル建設	
19	中和田町24 2-2	町家	大和郡山市 教育委員会	1989.5.9 -5.10	60	マション建設	
20	北越山町30 6-1	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1989.8.7	50	宅地造成	
21	冠山町630- 3	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1989.7.34	48	マション建設	
22	城内町6-10	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1989.10.11 -11.14	180	大和郡山市水道局庁舎建設	
23	城内町2-45	城内町	郡山市立 歴史考古学研究所	1990.1.18 -1.19	1350	県立城内高校体育館建設	
24	城内町253- 4-1	佐印町	大和郡山市 教育委員会	1990.10.25 -10.26	5	タイムカーバセル埋設	
25	北越山町11 0	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1990.11.15 -11.20	120	愛倉庫建設	
26	北越山町13 2-3	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1990.6.11	68	ガソリンスタンド建設	
27	北越山町15 2-3	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1990.8.20	45	アパート建設	
28	朝日町1-62	三ノ丸	大和郡山市 教育委員会	1990.1.16	12	大和郡山市総合病院改築	
29	城内町255 1-1	天守閣	大和郡山市 教育委員会	1991.2.15 -2.16	20	御剣神社社務所改築	
30	城内町1-25	二ノ丸屋形	郡山市立 歴史考古学研究所	1991.9.10 -9.9	3000	県立郡山高校校舎改築	
31	城内町252- 1	陣内町	大和郡山市 教育委員会	1991.9.9	18	個人住宅新築	
32	原原町478- 1	武家屋敷地	大和郡山市 教育委員会	1991.10.20	70	事務所建設	

## 文献

1. 泉武「郡山城縁曲輪跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1979年度）1980年、奈良県教育委員会
2. 東潮「郡山城・三ノ丸跡発掘調査概要報告」（『奈良県遺跡調査概報』1982年度）1984年、奈良県立橿原考古学研究所
3. 佐藤良二「郡山城追手門跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1982年度）1984年、奈良県立橿原考古学研究所
4. 東潮「郡山城・三ノ丸跡発掘調査報告」（『奈良県遺跡調査概報』1983年度）1984年、奈良県立橿原考古学研究所
5. 服部伊久男『郡山城第7次 追手東隅櫓・東多聞櫓発掘調査概要報告』（大和郡山市文化財調査概要2）1984年、大和郡山市教育委員会
6. 山川均『郡山城第12次 追手向櫓・多聞櫓発掘調査概要報告書』（大和郡山市文化財調査概要6）1987年、大和郡山市教育委員会
7. 土橋理子「郡山城・三ノ丸跡一部山城第9次発掘調査報告一」（『奈良県遺跡調査概報』1985年度）1986年、奈良県立橿原考古学研究所
8. 川上邦彦「郡山城跡第11次発掘調査報告」（『奈良県遺跡調査概報』1986年度）1989年、奈良県立橿原考古学研究所
9. 寺沢薰「郡山城跡第13次発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1987年度）1990年、奈良県立橿原考古学研究所
10. 服部伊久男・山川均『郡山城第16・17次発掘調査報告書—社会保険大和郡山総合病院及医師看護婦宿舎建設工事に伴う事前調査一』（大和郡山市文化財調査概要12）1989年、大和郡山市教育委員会

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺構

調査区を便宜上A～H区に分けたので、それに従って記述する。

A区では追手東隅櫓、続櫓、南面多聞櫓を検出している。東隅櫓の礎石は比較的良好に遺存していた。西側礎石列はほぼ完全に検出、 $50 \times 60\text{cm}$ 大の自然石の平滑面を利用している。礎石a・c・d・eは約1m等間で並ぶ。e～lは間を詰めて配されている。内、礎石lは東西に細長く裾え置く。また、hは他の礎石とは若干西側へズレている。礎石間に握拳～人頭大の自然石が置かれている。a～eの間隔約1mをこの部分にも取り入ると、g・i・kの各礎石が同じく等間で続くことになる。しかし、その礎石間に配されたf・h・j・iも同じ規模の石材であるので、g・i・kのみを礎石とすることはできない。e～iの部分はこの上に横木をわたし柱を受けたのではなか

ろうか。

北側礎石はa・b・rである。bとrの間の一石は取り除かれていた。150cm間隔で整然と並ぶ。 $50 \times 60\text{cm}$ 大の自然石の平坦面を利用する。西側の石列n・o・p・qは $20 \times 30\text{cm}$ 大の小形の自然石を使用する。約1m間隔で並び、西側のc・d・e・gに対応しているようである。この礎石列と東面石垣の間には裏込め石が少量検出されている。

推定される隅櫓の規模は東西約6m、南北約7mである。内部には特に掘り込んだような施設はなかった。南東端に $1.9 \times 1.3\text{m}$ の椭円形の浅い土坑があるが、



図6 調査位置図 (S = 1 : 5,000)  
(大和郡山市基本図(6)VI-OD95-3 使用)

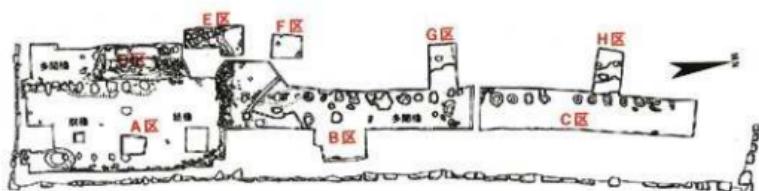


図7 調査区概略図

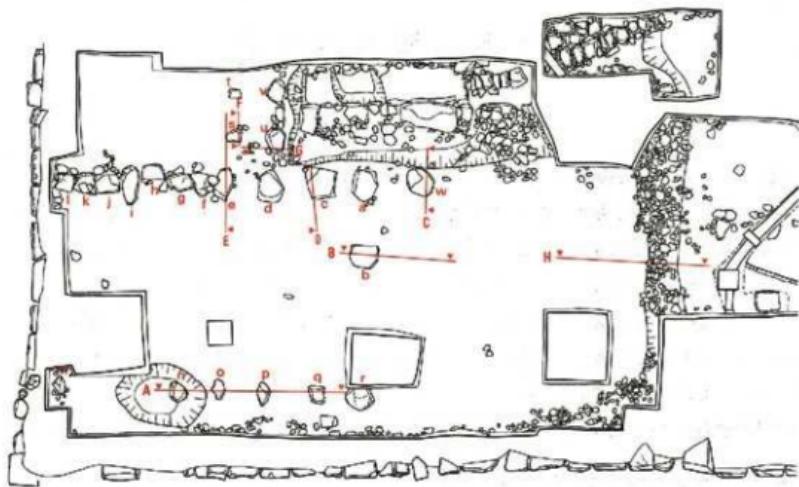


図8 磨石番号と断面図の位置

性格・時期ともに不明である。

礎石の据え付けは、断面図（A・B・D・E ライン）をみれば判断できるが、柱筋の布掘地形、柱位置の審掘地業ともに行わずに、整地していく過程で各々礎石を据え置く方法を採っているようである。また、礎石周辺には特に灰黄色・黄色の粘質土で根固めする場合が認められた。根石を本格的に施す例も少なく、礎石c・dに若干認められる程度であった。

続櫓は、隅櫓と多聞櫓を接続するものであるが、隅櫓の延長部分と考えた方がよい。隅櫓の北側に同レベルで続く施設で、東西約6×南北約7mの規模であり、平面的には隅櫓とほぼ同じ規模である。隅櫓の西側柱筋の延長上で礎石wを検出しているのみである。礎石の形状、規模は隅櫓に使用されているものと同じであり、据付けも類似する。礎石aとwの間隔は約1.2mである。北側は約0.6m下って多聞櫓に続く。この部分には石積が存在したと考えられるが、全て抜き取られており、その裏込め石が多数検出されている。この石積推定位置の東延長上には、大形の石垣天場石が残っており、かつ、多聞櫓部分の石垣天場石より約0.8m高い位置にあるので、およそそのラインで石積面が整えられていたと考えられる。また、後述するように、この石積は南側へ直角に曲がりD区の石積へ続いていると考えられる。

B区は東面多聞櫓の南半部に相当する。続櫓から約0.6m下がったレベルが礎石上面のレベルとなっている。大部分の礎石は抜き取られていたが、南端からの3基が遺存していた。中央の1基はコンクリート製集水管の下にあるため完全には検出していないが、約1m間隔で並ぶ。いずれも、面の平滑な自然石を使っている。礎石間に10×20cmほどの小石を並べ地覆としている。これより

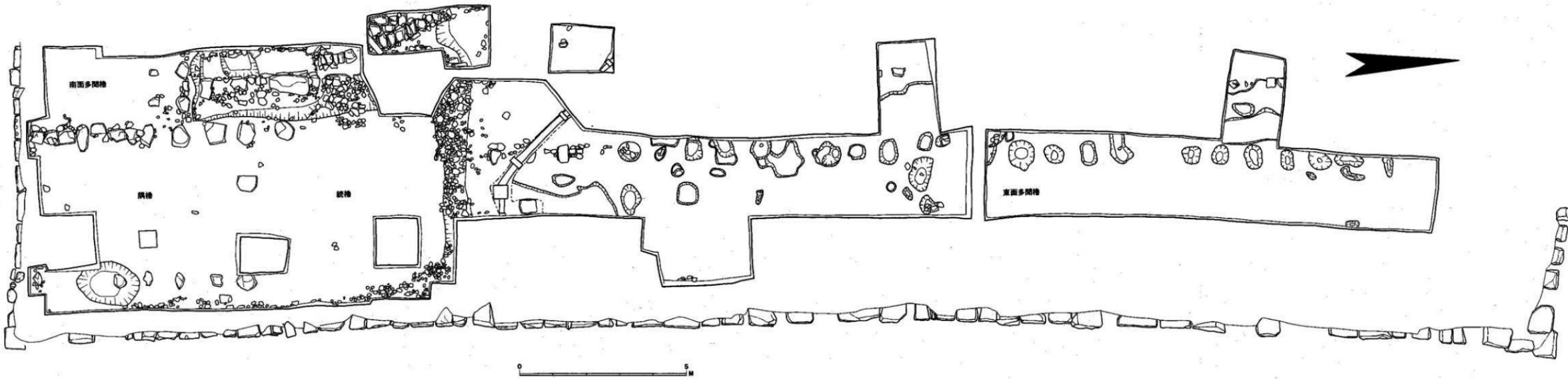


図9 造様平面図 ( $S = 1 : 80$ )

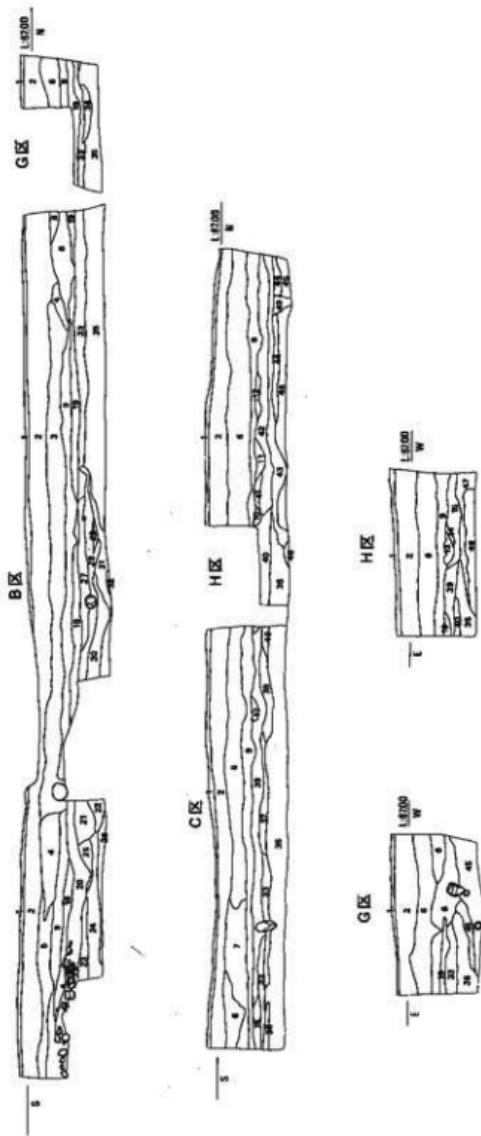


图10 耕查区土壤断面图

1. 灰土
2. 茶色沙质土 (砾土)
3. 淡褐色沙质土 (砾土)
4. 黄色沙质土 (砾土)
5. 淡黄色沙质土 (砾土)
6. 淡褐色土层 (砾土·烧地耕作土)
7. 淡褐色土层 (砾土)
8. 黄色土层 (灰·发黄剖面)
9. 沙质土层 (砾壳土)
10. 黄色土层
11. 黑色土层 (灰·灰·黄色土/砾块含沙)
12. 黑色土层
13. 黄色沙质土
14. 黄褐色土层
15. 黄褐色沙质土层
16. 黄色土层
17. 淡灰褐色土层
18. 淡褐色沙质土层
19. 黄褐色沙质土层
20. 黄色土层
21. 黄褐色土层
22. 黄褐色土层
23. 黄褐色土层
24. 黄灰褐色土层
25. 黄褐色土层
26. 黄褐色沙质土层
27. 黄褐色土层
28. 淡褐色沙质土层
29. 黄褐色土层
30. 黄褐色沙质土层 (砾块层不含C)
31. 黄褐色沙质土层 (砾块层含C)
32. 黄褐色土层 (砾块土·砾石/砾块含沙)
33. 黄褐色沙质土层
34. 黄褐色土层
35. 黄褐色土层 (砾块层不含C)
36. 黄褐色沙质土层 (砾块层不含C)
37. 淡褐色沙质土层
38. 淡褐色沙质土层
39. 淡褐色沙质土层
40. 黄色粘质土层
41. 淡褐色粘质土层
42. 淡褐色土层
43. 沙质土层
44. 黄褐色粘质土层 (地山山土)
45. 黄褐色沙质土层
46. 黄褐色沙质土层 (砾石层不含C)
47. 黄褐色土层
48. 沙质砂层



図11 磁石部断面図 (S = 1 : 20)

1. 淡褐色土（搅乱）
2. 黄色粘質土層（瓦片を少量含む）
3. 淡茶色砂質土層（粘質土ブロック少い）
4. 淡褐色砂質土（③層のブロック、カーボン粒、土器片を含む）
5. 暗茶色砂質土層
6. 淡黃茶色土層
7. 茶色砂質土層
8. 黑灰色土層
9. 灰黄色土層
10. 淡茶褐色砂質土層
11. 茶褐色土層
12. 茶褐色土層（瓦片・炭を多く含む）
13. 皮褐色土層
14. 黄色砂質土層
15. 淡茶色砂質土層

北側は不整形な抜き取り痕がほぼ1m間隔で続く。一番北側の磁石と次の抜取痕の間のみ、他と異って2mあるので、この部分に出口を想定できるかもしれない。他に槽内部で不整形な小穴を幾つか検出しているが性格は不明である。コンクリート製集水弁の北東で一辺45cmの方形の磁石を確認しているが、搅乱層からの出土でういた状態にある。トレンチ中央部を東に拡張した部分では何も検出されておらず、わずかに東面石垣の上部裏込め石を認めたにすぎない。

C区は、多聞櫓の北半部に相当、B区の状況とほぼ同じで不整形な磁石抜取痕が直線的に続く。磁石は1基も残っていないかった。抜取痕の間隔は約1mであり、B区の状況と同じ。南から5穴目と6穴目の間が倍の約2mあり、出入口部に相当すると考えられる。また最も北側の抜取穴と次の抜取穴（トレンチ外）の間もひろくあいており、この部分にも出入口が存在した可能性がある。

D区は隅櫓・続櫓の西側と南面多聞櫓に相当する。高約60cmの石積を南北5mにわたって検出した。先述したように、続櫓の北側石積と直交するものである。石積は2段積みで、最も大きい石材は1.2×0.6mの規模である。裏込め石も検出しているが、続櫓の西側には集石した様相が認められた。この石積の南端は、後述する南面多聞櫓の下部に入り込んでいることも明らかとなっている。すなわち、元々、この高さ60cmの石積基壇は隅櫓と続櫓の北・西側を画していたが、ある時期に廃棄され、南面多聞櫓を建設したことが知れたのである。石積の西側（SX-01）には多量の瓦が投棄されていた。また、SX-01の西側断面図（図12）をみると石材が多量にあり、SX-01部分とは異った埋方をしているようである。SX-01の北端からは石組暗渠が北西方向へ徐々にレベルを下げながら続いている。この石組溝の下部には瓦の集積はなかった。こうした状況からみて、当初の石積（基壇）を取り壊し、南面多聞櫓を建築する際に多量の瓦を廃棄し、一種の水溜めの機能をもたせ、石組溝へ流出させるという方法を採ったのではないかと推定される。

南面多聞櫓の磁石は2基、また、各々に対応する小磁石を2基確認した。磁石u・vは約90cmの間隔で、磁石間に小石を配し地覆とする。隅櫓の磁石より一回り小さく、50×40cm大の自然石を用いる。u・vの南には各々に対応するs・tの小磁石がある。u・vの柱筋との間隔は約90cmで

ある。さて、この南面多聞櫓の礎石列は、隅櫓の礎石の並びと整合しない点が留意される。 $u$ ・ $v$ の柱筋と隅櫓の礎石 $d$ はズレているのである。南面多聞櫓は、当初の隅櫓の西辺を画す石積みを埋めて構築されているので、このことが原因となっていると推定される。

E区では、D区の石組暗渠の延長部分を検出した。北西方へ向って斜々にレベルを下げている。底石を用いず、側石と蓋石から構成される。使用石材は自然石で、流路幅約12cm、深約20cmを測る。石組溝の南端と北端では約90cmもレベル差があり、相当急勾配となっている。

F区は1.5×2.0mの小規模な調査区である。頗る著な遺構は検出していない。

G区はB区の西に設けた拡張区である。1.8×2.7mの規模。西側に向けて面をそろえた石材を2基検出している。

H区は、C区の西側に設けた拡張区で、1.7×2.5mの規模である。西側に向けて面をそろえた石材を3基検出している。この石材の並びはG区まで直線的に続いているようである。多聞櫓の雨落溝とも思われたが、その場合、多聞櫓の軒出が約2.3mと異常に長くなってしまう。また、対応する石材がなく溝を成していないので、雨落溝（の痕跡）と考えるには無理がある。むしろ、多聞櫓を一回り大きくとり囲む縁石の一部と考える方が妥当であろう。

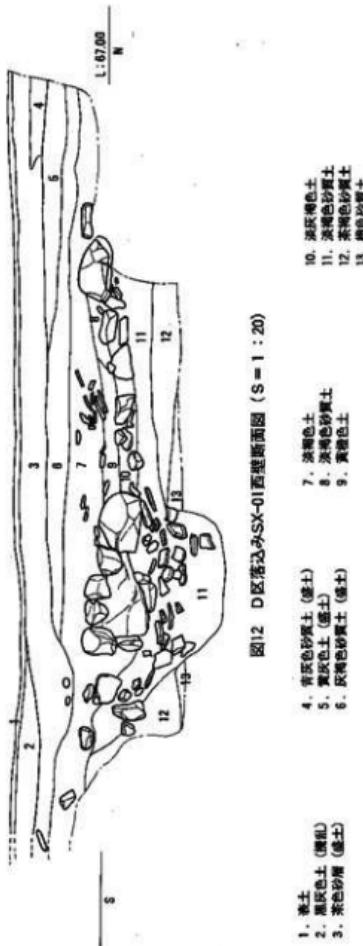


図12 D区落込みSKX-01西壁断面図 (S = 1 : 20)

## 第2節 遺物

今回の調査で出土した遺物の量は、通常のコンテナで約50箱分である。また、そのほとんどが瓦であり、土器類は2箱分ほどにすぎない。瓦の内、丸瓦・平瓦については未だ整理を終えていないので、ここでは軒丸瓦・軒平瓦に限って報告しておきたい。

### (1) 瓦専類

#### (A) 軒丸瓦

軒丸瓦については以下のように分類する。今回の調査では確認していないが、過去に出土例があるものも含めて設定した。

十二弁裏菊文	100型式
丸曜文	110型式
沢瀉文	120型式
酸漿草文	130型式
立葵文	140型式
花菱文	150型式
右三巴文	160型式
左三巴文	170型式
複弁八葉蓮華文	180型式

型式番号については3桁、100番台の数字を当て、各軒丸瓦に10型式分を配した。あくまで仮の型式番号があるので、将来的に変更することがある点、あしらかじめ含み置きたい。技法上の分類については法隆寺出土瓦の調査報告（小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊河留我一法隆寺昭和資財帳検査概報10-1』1989年）及び、西大寺の調査報告（奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年）に準拠した。

以下、主要な技法分類について引用しておきたい。

#### (瓦当と丸瓦の接合法)

A型…瓦当成形粘土、接合粘土が厚く、丸瓦の先端が瓦当に近い位置にあるもの。

B型…瓦当裏面の丸瓦接合位置は軽く指ナデするだけのもの。

C型…Bの後、広端にキザミかカキメをつけて丸瓦を接合するもの。

D型…C型に加えて瓦当裏面にもキザミかカキメをつけるもの。

#### (瓦当裏面調整)

A型…ナデが縦で丸瓦四面寄りの瓦当接合粘土を平坦にせず、瓦当裏面の頸の縁辺が丸みをもつもの。

B型…横方向主体のナデで裏面全体を平坦にし、頸も角張るもの。

C型…調整の最後に顎の円周に沿うナデを加えるもの。

(軒丸瓦の側面接合部の側面観)

A型…ほぼ直角をなすもの。角の部分には調整具であるヘラのあたりをとどめることが多い。

B型…丸瓦側面に粘土を加えて丸瓦側面が滑らかなカーブで瓦当裏面につながるもの。

C型…A型とB型の中間型。丸瓦の先端が瓦当裏面付近でカーブするが、瓦当裏面に滑らかにながらず、角をなし、ヘラのあたりもとどめる。

### 沢瀉文軒丸瓦

沢瀉（オモダカ）は池のふちや水田に生える多年草（図13 参照）。徳川譜代水野家の家紋として知られている。瓦当文は実物よりかなりデフォルメされている。文様構成について記す。まず中心にやじり方の葉身を配する。まっすぐ直上方に伸びる葉身を主葉、右下のものを右葉、左下は左葉とする。葉は中心部を凹ませ、複線表現に似た表現をとるが、全体に肉厚な感を与える。主葉の下から上方へ茎が伸び、途中三本に分岐する。各々、主茎、右茎、左茎とする。右茎と左茎は、各々右葉、左葉の中央下を通り、右上方、左上方に展開する。葉より上の茎部には各々5花の表現がある。内、下から2つは雌花の表現で5弁の花文となる。上の3つは蕾の状態の雄花を表現したものと思われる。蕾の表現にも2種類ある。先が3つに分かれるもの、2つに分かれるものである。雌花は下から第1雌花、第2雌花、雄花も

下から第1～第3雄花と名付く。主紋の周囲には細い圍線を廻らし、素文縁に至る。以上が基本的な瓦当文の構成である。なお、各部の名称は図14の通りである。

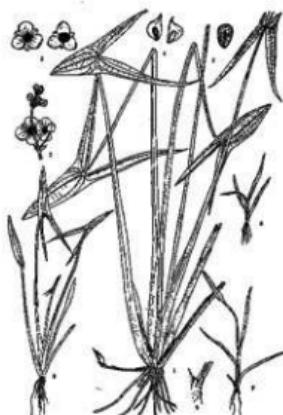


図13 オモダカの花と葉

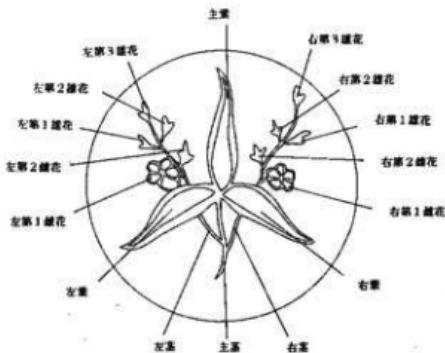


図14 沢瀉文の細部名称

今回の出土資料は、120・121・122型式の3型式に分類できた。1は120型式、主葉末端がまっすぐ上方に伸びるのが特徴である。また、右第1雌花が5弁表現、第2雌花は3弁表現、左は5弁表現の第1雌花のみで、第2雌花の表現はない、という特色もある。瓦当面にはハナレ砂を用いる。瓦当接合法は不明、C型裏面調整、側面観はB型である。丸瓦部凹面には荒い布目痕と側縁に直交するコビキ痕が残る。他部の調整はよくわからないが、ヘラで調整後、ナデで仕上げる。胎土は精良、焼成は良好で黒灰色を呈する。

2・3・4は121型式である。主葉の先端がかるく左へ屈曲して終わるのが特徴である。また、左右の第1雌花が5弁表現となり、左右第2雌花は蓄のままである。2~4は同范と考えられる。各々、瓦当にハナレ砂を用いる。瓦当接合法は4のみD型と確認できる。裏面調整は全てC型、側面観もすべて同じB型である。4の丸瓦凹面には側縁直交のコビキ痕が著しく残る。凸面は側縁平行のヘラ削りの後、入念なナデ調整を施す。いずれも胎土は精良、2と4は灰色を呈するが、3は燃しが強く灰黒色を呈する。

5~9は122型式とする。主葉の先端がかるく右へ湾曲して終わるのが特徴である。右第1雌花は5弁表現、右第2雌花は3弁に近い表現となる。左第1雌花は5弁表現とするが、1弁が左葉と重なり十分表現されない。左第2雌花の表現はない、という特徴も合わせもつ。いずれも瓦面にはハナレ砂をまく。瓦当接合法は、6~9がD型で、キザミ・カキメがよく観察できる。裏面調整は全てC型である。側面観は5がB型、他もB型と考えられるが、接合部を欠失していて判然としない。5の丸瓦部凹面には布目痕、側縁直交のコビキ痕が残り、凸面にはヘラ削りの単位がよく残る。他の個体は丸瓦部を各で不明。瓦当側面も丁寧にナデる。胎土は全て精良、5・7の焼成はやや甘く灰褐色を呈するが、他は灰色をなす。

10~17は型式不明とする。いずれも瓦当面にハナレ砂を撒く。10は主葉末端と右雄花が残る。主葉先端はほぼまっすぐのび、120型式に近い。瓦当接合はD型で荒いキザミが残る。11は瓦当下半部の破片。葉文の上部は平坦で静的表現をとる。裏面調整はC型、外縁部と側面部に丁寧なナデ調整を施す。12は右上半部の断片。5弁から成る第1雄花、3弁の第2雄花が認められる。雄花をつなぐ茎が消えている。接合法はD型。13も右上半部をとどめる。主文の表現は12とはば同じで、D型の接合。14は左半部の破片、左第2雄花が表現されない。15は左葉部の破片。裏面はC型調整、焼成が甘く、断面は茶褐色を呈する。16は左雄花部~外縁にかけて残る。D型接合。17は主葉末端をとどめるのみ。15以外はすべて暗灰色を呈する。

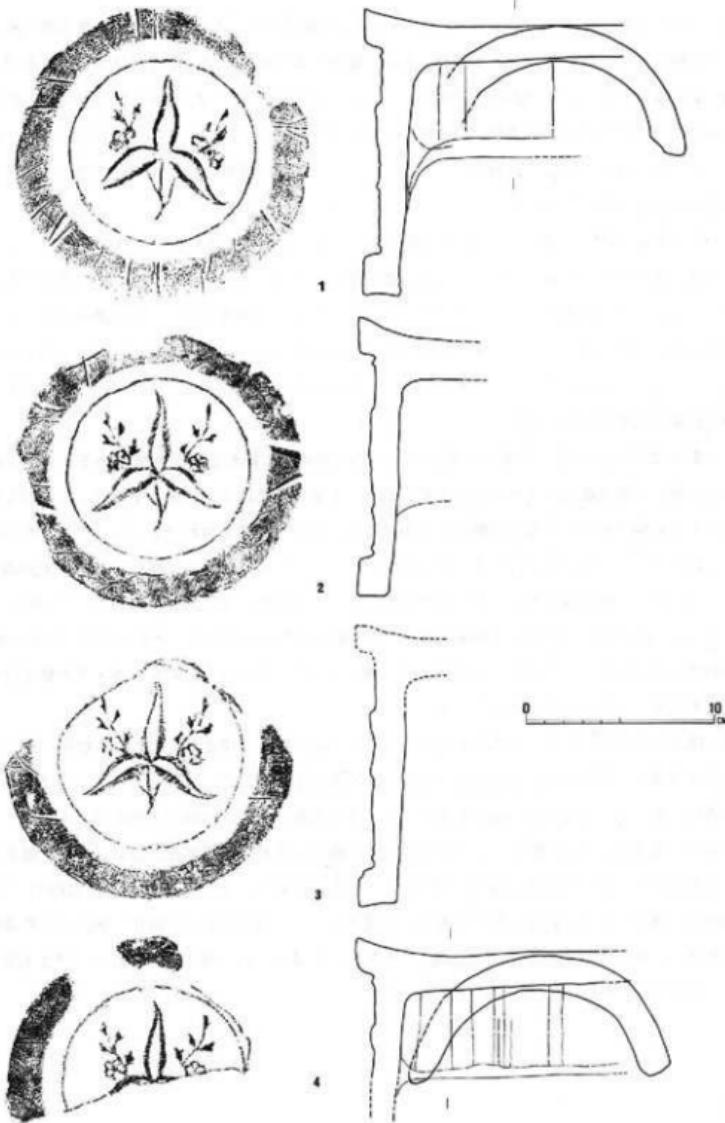
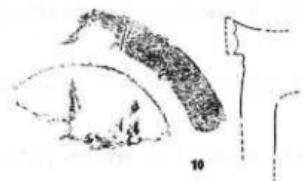
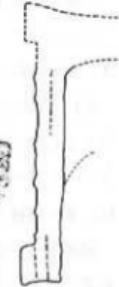
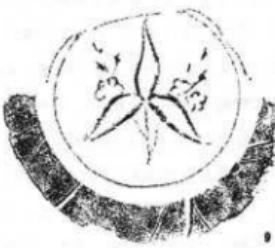
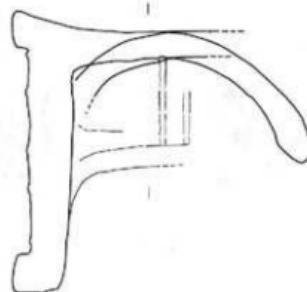
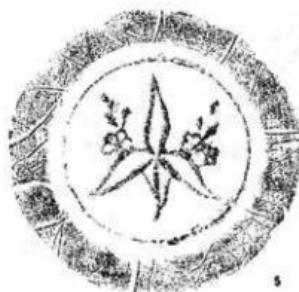


圖15 軒九瓦實測圖1 ( $S = 1 : 3$ )



0 10 cm

圖16 軒丸耳實測圖 2 ( $S = 1 : 3$ )

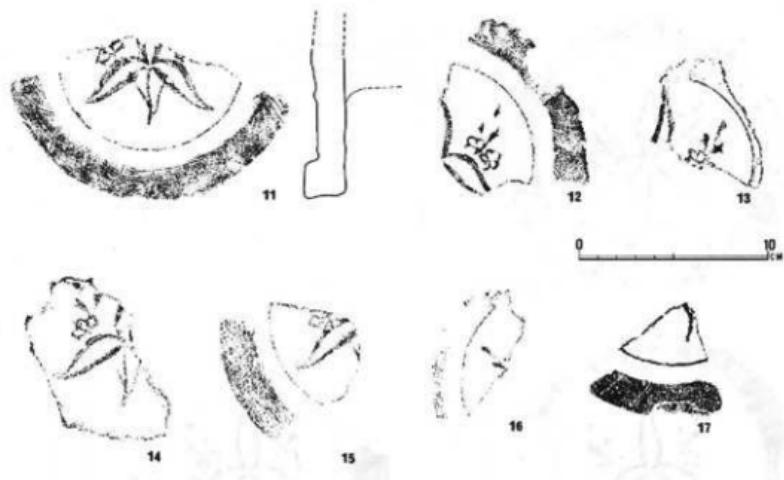


図17 軒丸瓦実測図3 (S = 1 : 3)

### 立葵文軒丸瓦

立葵文は本多家の家紋といわれている。茎がまっすぐ立つののでこの名があるが、葉文を植物学的にみれば、あおい科のいちび（きりあさ）に近い形を成す。瓦紋の構成は、中央に直上方にのびる主茎、右に彎曲する右茎、左に彎曲する左茎を配し、各々の先端に逆ハート型の葉文を付ける。葉文の端部は丸く巻き込む。茎と連続して主脈が表現され、さらに左右2つずつ側脈がのびる。葉文の表現は肉影風である。主茎と右茎の末端は小方形となりつながる。また、3茎ともに一条の外周線に接する。外区内縁に13個の珠文を配し、素文縁へとつづく。細部名称は図18の通りである。

7個体出土しているが、18・19・20は140型式、他も同型式とおもわれるが、瓦当面の遺存度が低いので不明とする。

18は丸瓦部も約20cm残存する。瓦芯にハナレ砂を撒き、接合法は不明、裏面調整はC型、側面観はB型である。丸瓦部凹面には布目痕、コビキ痕、ユビナデ痕が残り、凸面は側縁平行のヘラ削り後ナデで調整、側縁凹面の面取りが顕著である。胎土は精良、焼成も良好、燃しが強く灰黒色を呈

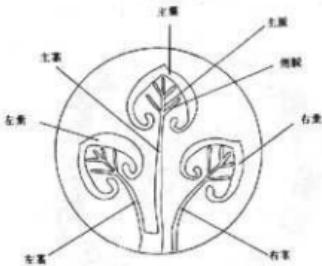


図18 立葵文の細部名称

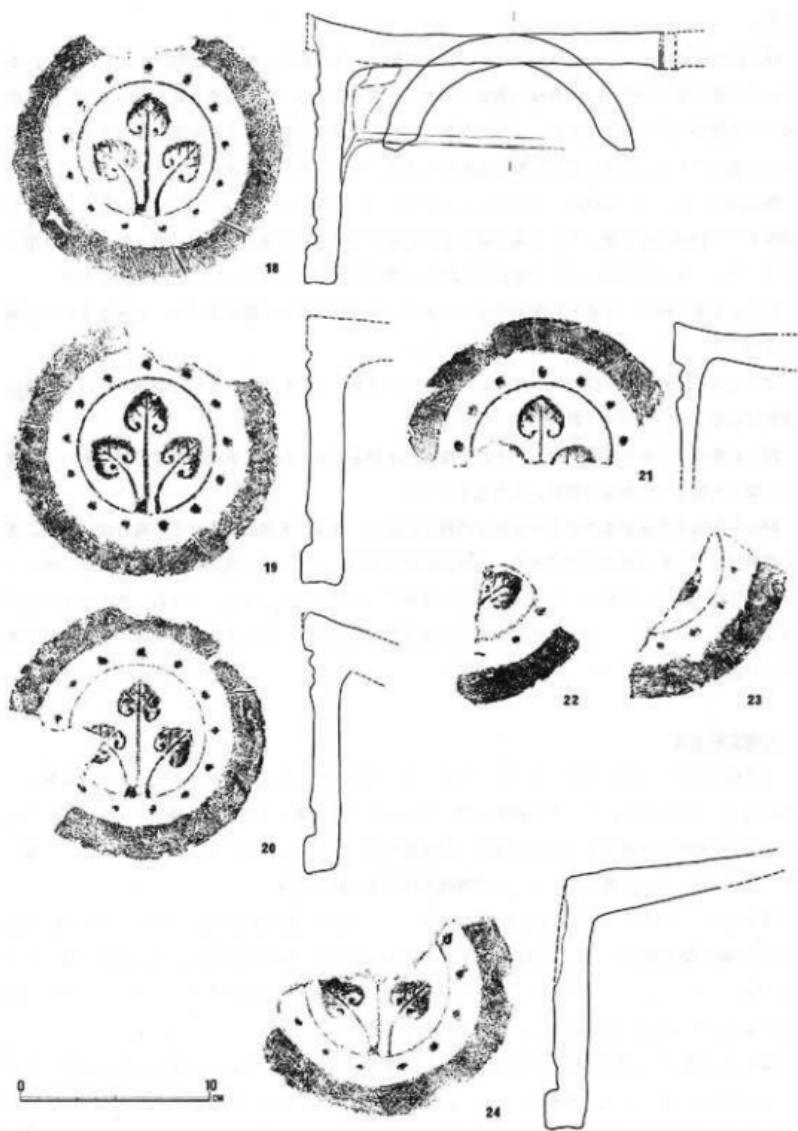


図19 軒丸瓦実測図4 (S=1:3)

する。

19の瓦当文は18と同じ。接合法はD型、裏面調整はC型である。接合のためのキザミは荒く、また、瓦当側の施し方で、外区外縁の裏面にキザミが及んでいない点が留意される。つまり、外区内縁より内側の部位に粘土を入れ、キザミを施し、外区外縁部の粘土を入れ丸瓦を接合させるという手順が想定される。胎土は精良、焼成も良好である。ただ、瓦当面は灰白色をなす。

20も140型式、左葉～右縁の一部を欠く。他に較べ主文がはっきりとしており、浮き出しが強い。圓線を介しL13個の珠文帶、そして素文縁に至る。接合法は不明、裏面調整はC型、側面觀はB型である。径5～8mm大の砂レキを少量混じる胎土、焼成は良好だが焼しが入らず灰白色をなす。

21は上半部の破片、主葉と右葉半分をとどめる。珠文は7個のみ確認される。瓦当がきわめて薄く8mmほどしかない。胎土は精良、黒灰色を呈する。

22は右葉部の破片、文様全体の盛り上りが低く、圓線も痕跡程度、珠文が3個認められる。裏面調整はC型、瓦当厚が薄く21と同じくらいである。

23も右葉の下半分が残るのみ。くずれた珠文が4個みとめられる。裏面調整はC型である。砂礫を少量含む胎土で、焼成は良好、灰黒色を呈する。

24は瓦当面上半を剥落させるが丸瓦部の残りは良い。珠文が8個認められる。接合法は不明、裏面調整はC型、側面觀はB型である。丸瓦凹面には布目、コビキ痕が残る。凸面はヘラ削り後ナデで、瓦当側面も同じ調整法による。瓦当の上部側面に側面併行のキザミが施され、補充粘土の接合強化を図っているようである。瓦当と丸瓦の接合角が直角よりやや大きい鈍角をなす。細砂粒を多く含む胎土で、焼成は良好、灰黒色を呈する。

### 九曜文軒丸瓦

主文様は小円で九曜（九星）を表す。九曜（星）とは、日・月・火・水・木・金・土・羅剎・計都を指す。日本では各々に、千手觀音・勢至菩薩・虛空藏菩薩・赤勒菩薩・藥師如來・阿彌陀佛・聖觀音・不動明王・釈迦佛を対応させる。肥後細川氏一族の紋章として著名である。中心に一曜、その周囲にや小さい8曜を配し、一条の圓線を経て素文縁に至る。

25は110型。直径16.7cmを測る大ぶりの瓦である。中心の一曜は径23mmと大きく、その周囲は径19mmの8曜を配し圓線に至る。外縁高も深く、約11mmを測る。接合はD型で、瓦当裏面全体にキザミを施す。瓦面にハナレ砂を用いる。瓦当側面の整形が難で、凹形をなす部分が多い。胎土には細砂を非常に多く含み、焼成は甘く、暗黒褐色を呈する。

26は111型式、110型式に較べて直徑が小さく、曜文の配置が密である。圓線は右廻りで徐々に細くなり途中で切れている。細砂をひじょうに多く含む胎土で、焼成不良のため灰茶色を呈する。表面剥落のため調整は判然としないが、瓦当側面の様子は110型式と類似している。

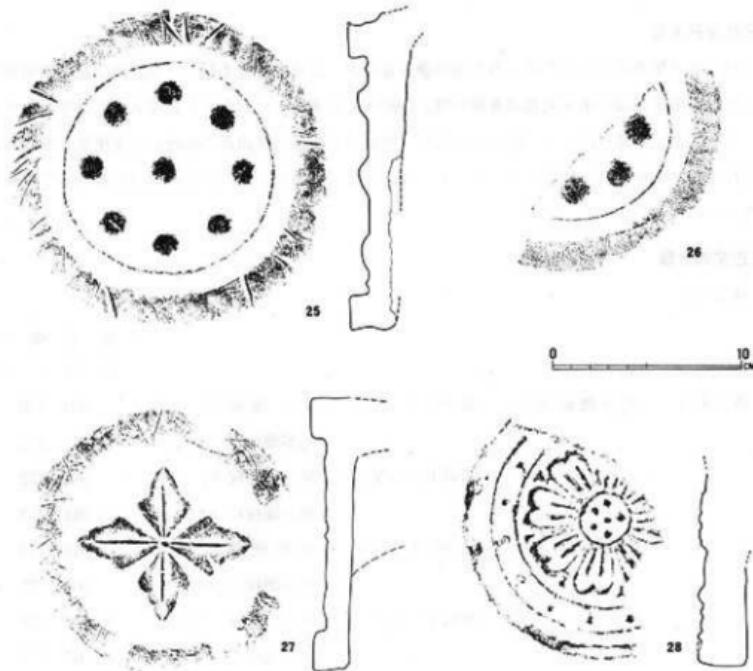


図20 軒丸瓦実測図 5 (S = 1 : 3)

#### 花菱文軒丸瓦

27は、柳沢氏の家紋である四つ花菱で、通常“柳沢菱”と呼ばれている。アカバナ科の一年生草本であるヒシの花弁を装飾的に造形したもので、丸みを帯びた菱形の花弁を四花配する。花心に蜜槽を表す小点を置き、そこから四方に花弁中心を通るおしべが直線的に表現される。圓線や珠文帶ではなく、素文縁に連がる。瓦当径145mmを測り、裏面丸瓦部の接合部にはキザミを施す。裏面調整はC型である。胎土は精良、焼成は良好であるが、焼しは弱い。

#### 複弁蓮華文軒丸瓦

28は、180型式の復古瓦、複弁八葉蓮華文である。中房に弁よりやや突出した1+5の蓮子を配する。2つの支葉をもつ蓮弁は2つに分離せず、間弁は中房に達しない。外区内縁に7個の珠文がある。外縁の文様は不明である。調整技法は磨滅のため判然としない。胎土の精良、焼成不良で暗青灰色をなす。

### 三巴文軒丸瓦

三巴文の分類方法については、西大寺の調査報告書（奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年）に準拠した。ただし、型式番号は異なっている。分類は下記の通りである。珠文帯の有無、圈線の有無、巴文頭部の状況、巴文尾部と圈線の接合の仕方、などを軸に分類されている。右三巴文には 160番台、左三巴文には 170番台の型式番号を当てた。

### 三巴文の分類

珠文なし	型 式 番 号	
	右三巴	左三巴
珠文あり		
内外圈線あり	頭同土つく 尾が圈線につく ..... 160	170
頭同土つかない 尾が圈線につかない ..... 161	171	
頭同土つかない 尾が圈線につく ..... 162	172	
頭同土つかない 尾が圈線につかない ..... 163	173	
内圈線のみあり	頭同土つく 尾が圈線につく ..... 164	174
頭同土つかない 尾が圈線につかない ..... 165	175	
頭同土つかない 尾が圈線につく ..... 166	176	
頭同土つかない 尾が圈線につかない ..... 167	177	
圈線なし	頭同土つく ..... 168	178
	頭同土つかない ..... 169	179

### 右三巴文軒丸瓦

29は166型式、上部が平坦な三巴文を配し、尾部は圈線に接合する。外区内縁は15個の珠文を配する。珠文の間隔はまばらで、また、圈線とくっつくものもある。外区外縁には凸凹があり、粘土の継目も残っている。瓦当と丸瓦の接合法は不明。瓦当面に粘土を詰める場合、先に外区内縁以内の粘土を入れ、さらに外縁部の粘土を入れているのが観察される。側面観はB型、裏面調整はC型。丸瓦部凸面はヘラ削りの後ナデで平滑にする。凹面には側縁直交のコビキ痕が著しい。側縁凹面の面取りも安定している。径3~5mmの大細砂を少量含む胎土で、瓦当面は灰白色、他の部位は灰黒色を呈する。

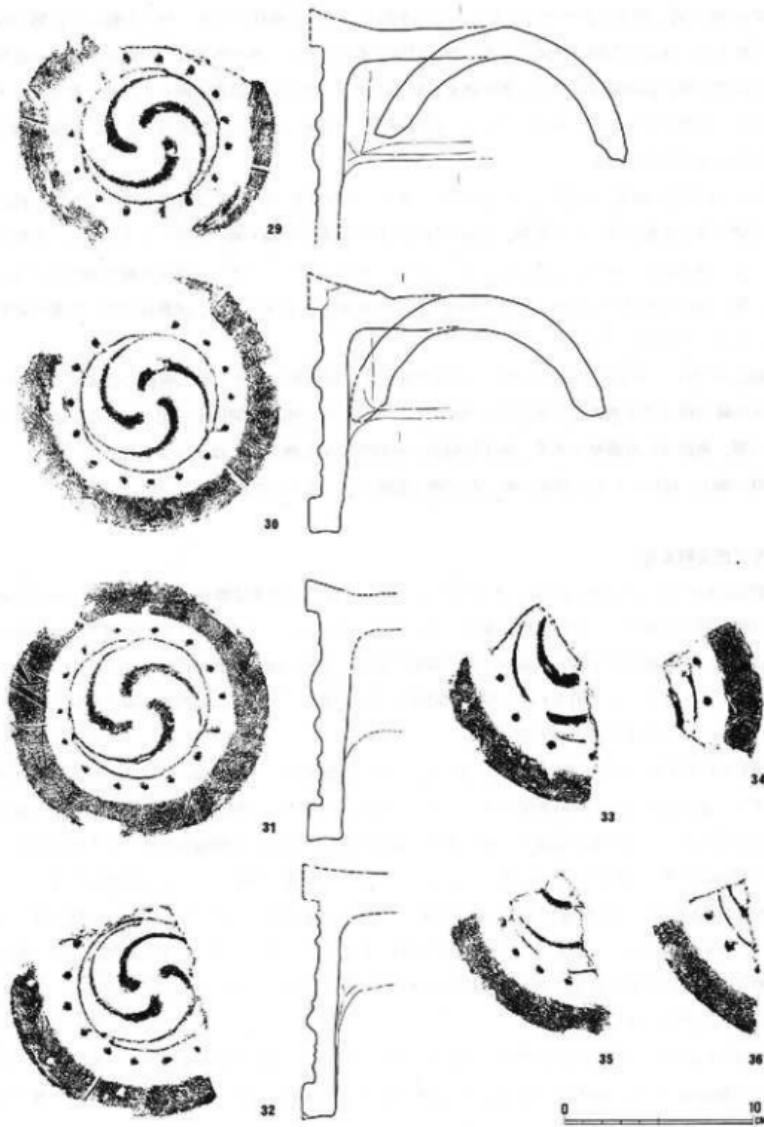


图21 轩九瓦实测图 5 ( $S = 1 : 3$ )

30も166型式。頭部上面がやや平坦な三巴文を配し、尾部は圓線となる。外区内縁には15個の珠文を配する。珠文の間隔、範傷からみて29と同范と考えられる。外区外縁はヘラ削りが及ぶ。瓦当接合法は不明、側面觀はB型で、裏面調整はC型である。丸瓦凹面は29と同じ、凸面も削り後ナデである。瓦当にはハナレ砂を用いている。径5mmの大い小石を含むものの精良な胎土で、焼成は焼しがかかり灰黒色を呈する。

31も166型式。頭部～身部上面がやや平坦な三巴文を配し、尾部は圓線となる。外区内縁には15個の珠文を配する。その間隔、珠文にはみられる範傷から29・30と同范と考えられる。瓦范にはハナレ砂を使い、接合法はD型で、キザミが良く残る。また、キザミは外区外縁の裏側には及ばず、幅1cmの無刻目帯が認められる。焼成不良のため表面の剥落があり、調整は不明、少量の砂粒を含む胎土で灰黒色を呈する。

32は167型式。頭部が丸みをおびた三巴文を配する。尾は約半周するが、圓線には接続しない。外区内縁の珠文は9個確認できるが、全体の数は不明、珠文相互の間隔も一定していない。接合法はD型、裏面はC型調整である。胎土は精良、灰白色を呈し焼し焼には至っていない。

33～36は、細片のための型式不明。内、33は圓線のないタイプである。

### 左三巴文軒丸瓦

37は176A型式。上面が扁平化した左廻りの三巴文を配し、尾部は圓線に接続する。外区内縁に13個の珠文を配する。外区外縁は素文であり、ヘラ削り後ナデで平滑にする。瓦当と丸瓦の接合法は不明、側面觀はB型、瓦当裏面はC型調整である。丸瓦凹面には側縁に平行する細かいタタキを施すが、一部はナデで消されている。凸面はヘラ削り後ナデである。砂粒を少量含む胎土で、全体に焼しがかかり黒灰色を呈する。

38も176A型式。頭部上面が平坦な三巴文で、尾部は圓線につく。13個の珠文を配し、外区外縁は素文。瓦当范にはハナレ砂を使用する。瓦当と丸瓦の接合法は不明、瓦当裏面調整はC型、側面觀はB型である。丸瓦部凸面はヘラ削り後ナデ調整を施し、凹面には側縁直行のコビキ痕が残る。瓦当裏面は円周方向のヘラ削りの後ナデを加える。胎土は精良、焼しがかかり灰黒色をなす。

39も176A型式、頭部が扁平な左三巴文を配し、尾部は圓線につける。外区内縁に13個の珠文を置く。その間隔はほぼ一定している。外縁は素縁。接合法はD型でキザミがよく観察できる。裏面調整はC型、側面觀はB型である。砂粒を若干含む胎土で、焼成は悪く灰白色の部分が多い。他例に較べて瓦当厚が薄い。

40も176A型式、頭部上面が平坦な左廻りの三巴文を配し、尾部は圓線につける。外区内縁の珠文は10個確認できる。接合法はD型、裏面調整はC型、側面觀はB型である。胎土は精良、焼しが入り灰黒色を呈する。

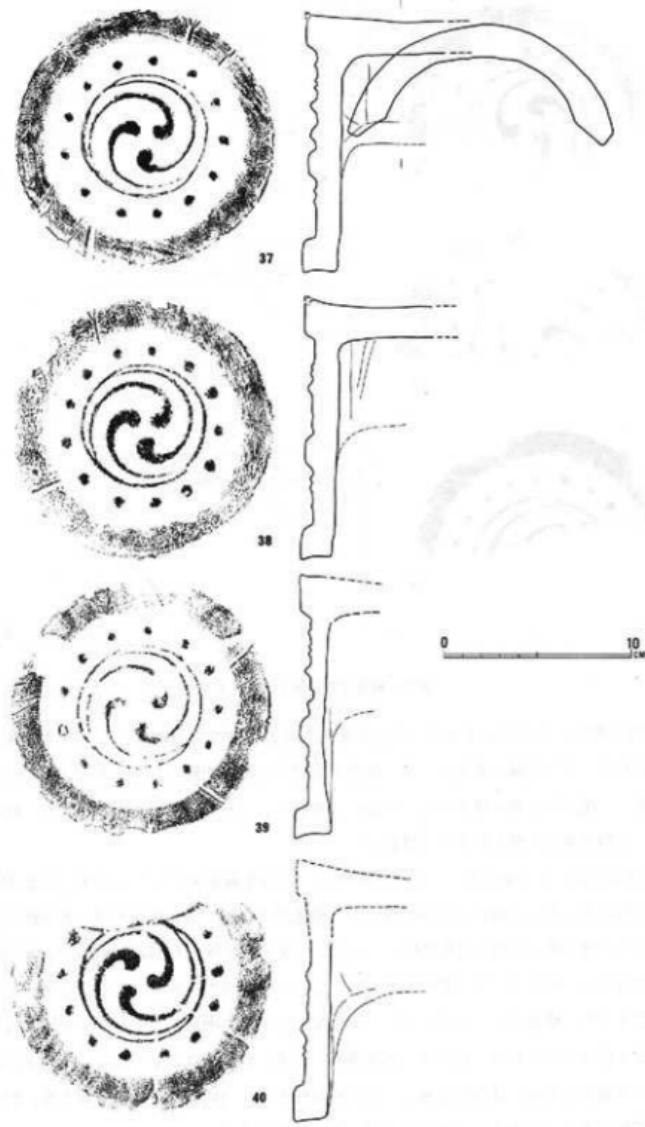


図22 軒九瓦実測図 7 (S = 1 : 3)

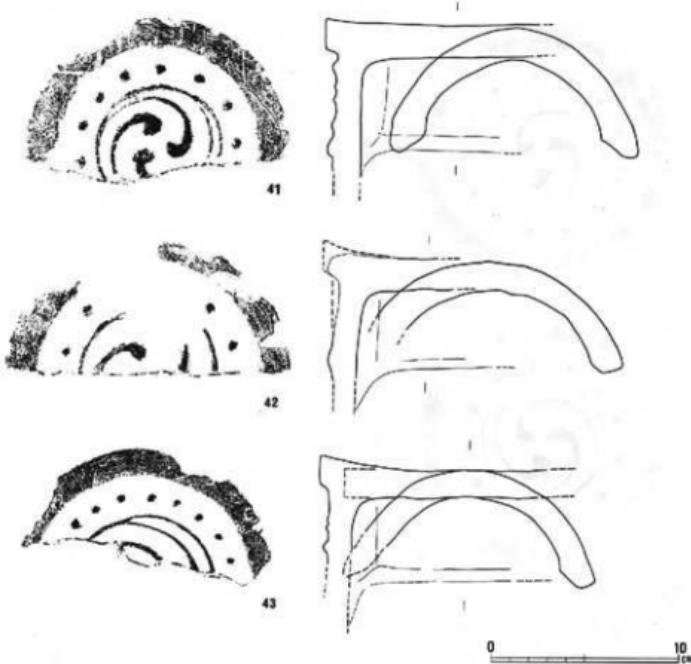
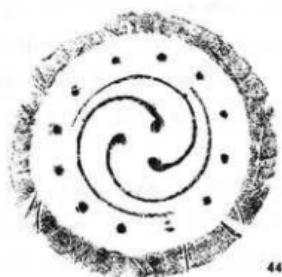


図23 軒丸瓦実測図8 (S = 1 : 3)

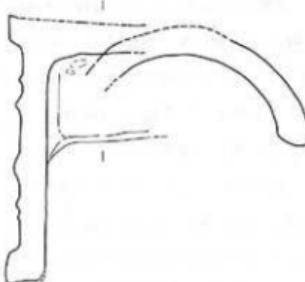
41は176A型式、上面が平坦な左三巴文を配し、尾部は連なり圓線となる。外区内縁に珠文が8個確認される。外区外縁は素文である。接合方法は不明、側面観はB型である。丸瓦凸面は側縁に平行するヘラ削りで丁寧に仕上げる。凹面には布目痕、コビキ痕と細い叩目が残る。砂粒を少量含む胎土、灰白色を呈し焼し煉しのかかりは鈍い。

42は176B型式。やや扁平化した巴文を配する。尾部先端を欠失しているが、尾部は圓線に付くものと思われる。外区内縁に小ぶりの珠文が5個確認できる。接合法は不明、側面観はB型。丸瓦部凸面はヘラ削り痕、凹面には布目痕、コビキ痕が残る。瓦当外区外縁と側面にもヘラ削りを施す。瓦当底部にはハナレ砂を用いる。細砂を若干含む胎土で、焼成なやや甘いものの灰黒色を呈する。

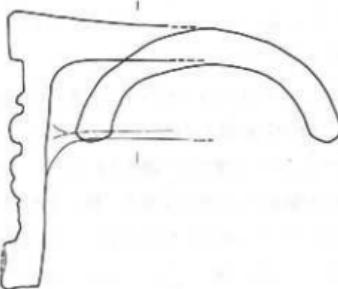
43は型式不明。稜線のしっかりした左巴文を配し、尾部は圓線とつながる。外区内縁には小ぶりの珠文が8個みとめられる。接合法、裏面調整は不明、側面観はB型である。丸瓦部凸面はヘラ削り後ナデを施し、凹面には布目痕、コビキ痕が残る。一方の側縁凹面は面取るが、他方は丸く取める。細砂を多く含む胎土で、焼成は不良、灰白色を呈する。



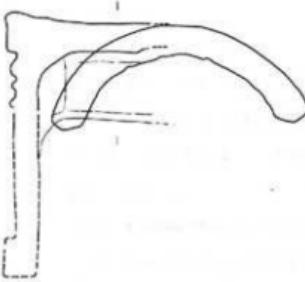
44



45



46



47

0 10 cm

图24 轩九瓦实测图 9 (S = 1 : 3)

44は179A型式。頭部から尾部にかけて稜線が明瞭な左三巴文を配する。尾部は約半周するが圓線はない。外区内縁には12個の珠文を配する。接合法は不明、瓦当裏面はC型調整、側面観はB型である。丸瓦凸面はヘラ削り、凹面には細い叩痕が残るが、ナデ、指頭圧による荒い調整で消されている。瓦当側面にも丁寧なナデを施す。細砂粒を多く含む胎土で、焼成は不良。灰色を呈するが、部分的に茶灰色の部分が残り、焼焼には至っていない。

45は179C型式、頭部が丸く大きい左三巴文を配する。尾部は半周し、圓線を伴わない。外区内縁には、計16個の珠文を密に配する。珠文間はわずか1~2mmしか空いていない。外区外縁は素文で、幅25mmと広い。瓦当と丸瓦の接合法は不明、C型裏面調整で、側面観はB型である。丸瓦凸面はヘラ削りの後ナデ調整するが、瓦当面近くに窓目の痕跡が若干認められる。凹面には側縁直交のコビキ痕、布目痕、細い叩目がみられる。瓦当周縁部を面取るのが特徴的である。胎土は精良、焼しが強く銀燐色を呈する。

46は型式不明、瓦当面には左三巴の尾部と珠文6個が認められる。瓦当面の大きさ、珠文の配置状況からみて、42の179C型式に近いものと思われる。接合法はCかD型、側面観はB型である。丸瓦部凸面はひじょうに丁寧にナデ調整されている。凹面には側縁に平行する細い内叩き目が残る。細砂粒を少量含む胎土で、灰色を呈する。焼しが浅い。

47は179B型式とする。瓦当下半部の破片、上面が平坦な三巴文を配し圓線を伴わない。5個の珠文が認められる。径約3mmの小ぶりの珠文である。瓦筋にハナレ砂を使用する。焼成が甘く、表面が剥落しているため調整は不明である。

#### (B) 軒平瓦

軒平瓦の分類については、未だこれまでの発掘資料を含めた体系的分類を行っていないので、とりあえず3桁200番台の数字を付し、暫定的な型式番号としておきたい。なお、頭部の形態分類については、西大寺の発掘調査報告書(奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年)に準拠した。参考のため分類図を引用しておく(図25)。

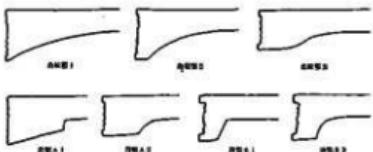


図25 頭部の形態分類

『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』  
1990年に掲る)

48~59の12個体は200型式とする。3弁の花文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦である。唐草文は連続3回反転し、唐草の巻きは比較的強く、先端は丸くふくらんで收める。左第2単位は丸く巻くが、右第2単位が鋭角に曲がるのが特徴的であり、左右対象にならない。すべて段類B I類である。上外区の上縁を面取るようであるが、面取りは丸みを帯びて鈍い。下外区・脇区の外縁には面取りを施さない。瓦当の接合は、平瓦広端凸面にキザミを、また、瓦当部上面(内区上面)にも

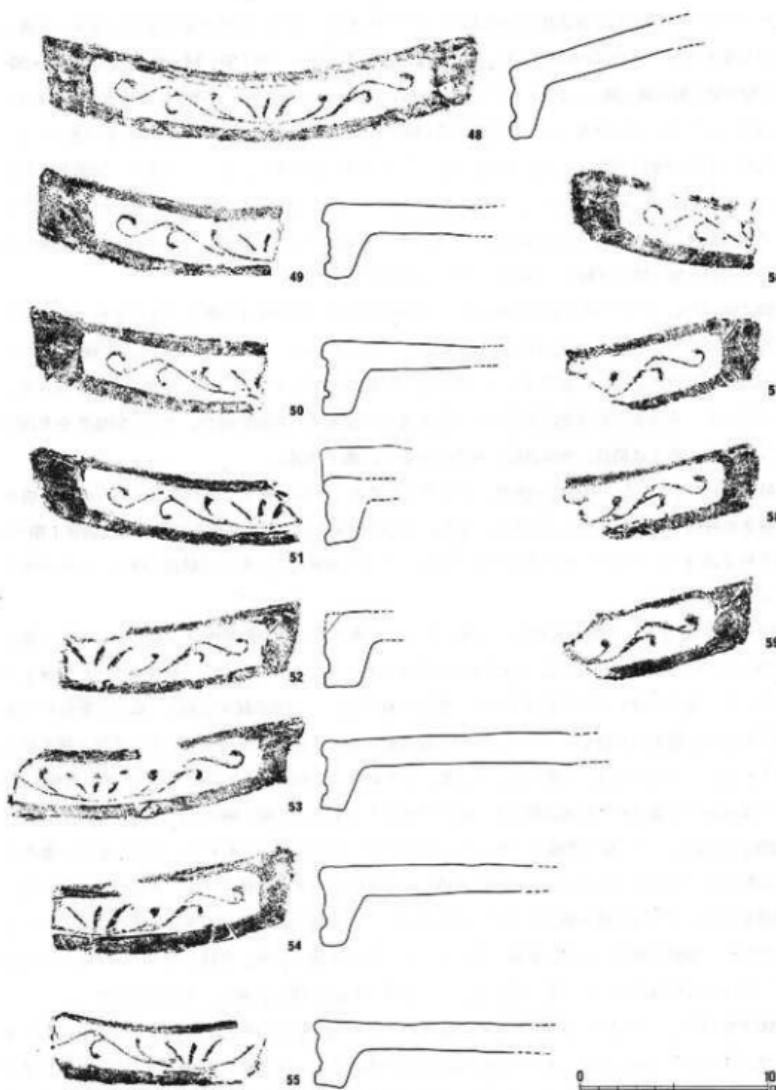


図26 軒平瓦実測図1 (S=1:3)

キザミを入れて接合する頸部貼付の技法によると思われる。瓦当と平瓦の接合部にはほとんど補充粘土を使わない。接合部の調整には、平瓦側縁に直行するナデ（48・53・54・56）とハケ（49・50・51・52・55・57・58・59）がある。ハケ状の痕跡は、板状具で強くナデつけるため残ると思われる。頸部はヘラにより入念に成形される。52・55・56の頸部後縁にはヘラによる面取りが施されている。平瓦部凸面の調整は判然としないものが多い。ナデでスリ消されているようである。凹面も所々に布目痕を若干留めるものであるが、大部分はナデにより平滑に仕上げられている。胎土は特徴的で、いずれの個体にも白色雲母の微細片がきわめて多く含まれている。焼成は全体に甘く、48は燐しが入るもの、52・55は淡褐色、他は灰白色～灰黒色を呈する。

60は201型式、3弁の花文を中心飾りとする均整唐草文。唐草文は分離して3回反転する。唐草の巻き込みは弱い。第1単位は徐々に太く収める。瓦当部にはハナレ砂を使用、凹面前縁を面取る。瓦当は頸部貼付法により、接合部を強くナデする。段頸B I類であるが、ナデが強くB II類のようになっている。平瓦部凸面は側面平行のヘラ削り後ナデを施す。凹面の場合、ナデが側縁直交方向になっている。胎土は精良、焼成良好、灰白色を呈し、燐しは弱い。

61も201型式である。中心飾りを欠く、左半分の破片。3回反転する唐草文が認められる。唐草の巻きの程度も60と同じくらいである。瓦部にハナレ砂を使い、凹面前縁を面取る。段頸B I類で、補充粘土はほとんどない。他の部位はヘラ削り、ナデで調整する。胎土は精良、燐しがかかり灰黒色をなす。

62～64は202型式、3弁の花弁を中心飾りとし、分離2回反転の均整唐草文をもつ。唐草の巻きは強いが、中心飾りを含めて瓦当文全体が小ぶりである。唐草の第2単位と脇区の間が約20mmも空いている。瓦当にはハナレ砂を使用する。脇区の幅が広い。凹面前縁を面取る。62のみ頸貼付と確認されるが、他も同じ技法であろう。すべて段頸B I類で、接合部を強くナデする。重厚な補充粘土は入れない。平瓦凸面はヘラ削りにより、他、瓦当裏面、側面はヘラ削り後ナデで丁寧に調整する。胎土は細砂を少量含む。焼成は63のみ不良で茶褐色を呈するが、62・64は灰白色・灰黒色をなす。

65は203型式。中心飾りは橋花であろう。下部下弁の先端が2つにわれる。3回反転の分離唐草文を配する。唐草文の上面は平坦で巻きは強い。瓦当にはなれ砂を使用する。外区の状況は不明。頸部貼付で、接合部は補充粘土なしに入念にナデする。段頸B I類。瓦当の裏面・側面はヘラ削り後入念なナデ調整を施す。凸面は側縁に直行するヘラ削りを施した後、側縁平行のナデで入りすり消す。凹面には側縁併行のヘラ削り痕が著しい。胎土は精良、燐しが強く、灰黒色を呈する。

66は204型式。5弁からなる花文を中心飾りとし、2回反転の均整唐草文をもつ。唐草の第1単位は大きく巻き込み先を丸く収めるが、第2単位の巻は弱い。唐草文は複線表現である。頸部貼付で瓦当を成形、凹面前縁を幅広く面取る。段頸B I類である。平瓦凹面にはヘラ削りとナデが入り乱れた状況で、瓦当裏面・側面はヘラ削り後ナデで調整する。胎土は細砂を多く含む。燐しは弱く、灰黒褐色を呈する。



圖27 軒平瓦実測図 2 (S = 1 : 3)

67は205型式、大部を欠失する。中心飾りは、山形の弧線が残るもの全形は不明である。2回反転する複線表現の均整唐草文を配する。唐草文は下外区から展開し、第1単位は大きく巻き込み、第2単位は2回屈曲しながら巻き込む。瓦当の大きさからみて、第3単位は無いと考えた。頸部貼付法で、上面には平瓦部凸面広端に施されたキザミの圧痕が著しく残る。瓦当裏面の接合部には補充粘土を入れ、入念にナデする。下外区・瓦当側面にはナデを施す。頸の形態は不明である。細砂粒を多く含む胎土で、焼成は良好、焼しが強く、銀黒灰色を呈する。

68は206型式、中心飾りに3弁からなる花弁を配し、連続唐草が3回反転する均整唐草文軒平瓦である。中心飾りの中央弁は太く、唐草も肉厚な表現である。基本的には200型式と同じ構成をとる。瓦芯にはハナレ砂を使用、外区を欠失し、瓦当成形は不明である。平瓦凹凸面には丁寧なナデ痕が残る。段頸B I類で、接合部を強く板ナデしている。胎土は精良、銀灰色を呈する。

69は207型式。3弁からなる3葉弁を中心飾りとする。2回反転する唐草文を配し、唐草の先は丸く収める。段頸B I類で、頸貼付で成形する。大部の調整は磨滅が激しく不明であるが、瓦当の下側面においてヘラ削り後ナデを施しているのが確認される。焼成は不良、茶褐色を呈し、胎土は細砂粒をひじょうに多く含む。

70は208型式とする。中心飾りは唐草の蔓が交叉するように表現され、左右対照とはならない。2回反転する唐草が認められる。文様は細く繊細な表現である。凹面前縁を幅広く面取る。段頸B I類。砂粒を若干含む胎土で、焼成は不良、灰白色を呈する。

71は209型式、中心飾りは下向きの3弁からなる木葉文で、連続する2回反転の唐草文を配する。脇区が広く幅55mmを測る。瓦芯にはハナレ砂を使用する。頸貼付で、補充粘土は薄い。段頸B I類。調整はヘラ削り後ナデで各部に認められる。精良な胎土、焼成はやや甘く、焼しにもぶい。淡灰色を呈する。

72は210型式、中心飾りは3弁から成る花文で、左右の2弁は複線表現となる。中央の弁形は不明。3回反転の唐草文を配するが、第1・3単位の端は中心飾りの下の点に収束する。唐草の巻きは強い。頸部貼付法で、頸部後縁に狭い面取りが入る。胎土は細砂を若干含み、焼成不良、灰白色を呈する。

73は211型式とする。瓦当文の全形は不明、3回反転の均整唐草文であろう。唐草は梗が鋭く高い表現である。瓦芯にハナレ砂を用い、頸貼付技法、段頸B I類である。凹面前縁を約10mm幅で面取る。各部はヘラとナデで入念に仕上げ調整する。側辺に高さ25mmの懸りがある。脇部上に貼り付けて取りつける。断面は台形で、上部が幅狭となる。胎土は精良、焼成も良好、暗青灰色を呈する。懸瓦の出土はこの1点のみである。

74は212型式、中心飾りは不明、唐草は細く高く表現され、巻き具合も安定している。3回反転であろう。凹面前縁を幅広く面取るのが特徴的である。瓦当芯にハナレ砂を使用、接合法は頸部貼付である。段頸B I類。瓦当側面はヘラ削り後ナデで調整する。胎土には細砂粒が若干含まれる。

焼成は甘く、灰白色を呈する。

75は213型式、巻きの強い唐草の第2単位が残る。段頭B I類、各部位ともヘラ削り後丁寧なナデ調整を施す。胎土は精良、灰黒色を呈する。

76は214型式、唐草の巻く方向は75と同じであり、同一型式の可能性がある。脇区が広い。段頭B I類。各部ともヘラ削りの後ナデで調整。胎土は精良、瓦当部は灰黒色を、たの部分は灰白色を呈する。

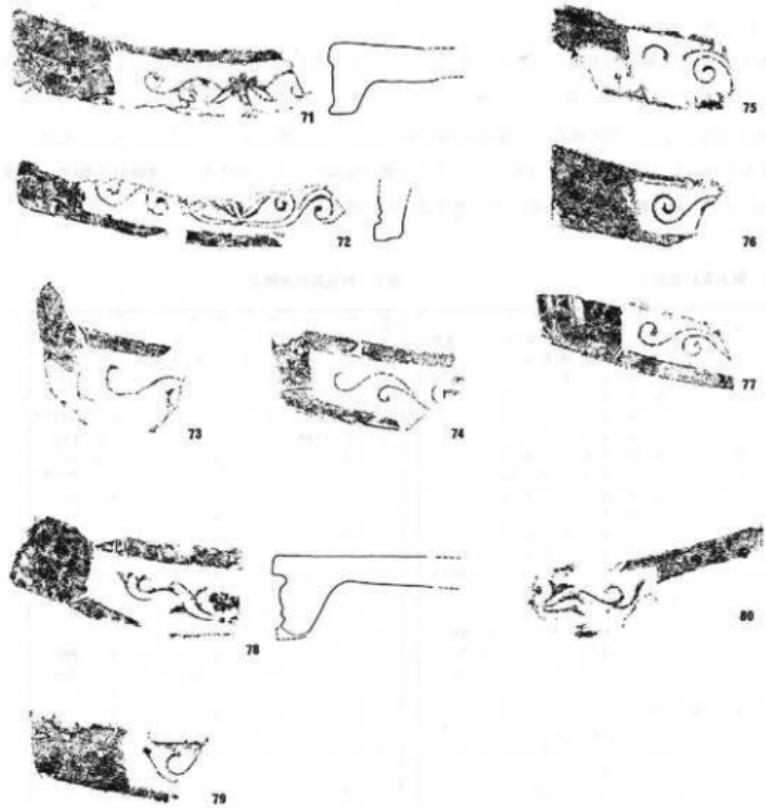


図28 軒平瓦実測図3 (S = 1 : 3)

77は215型式とする。唐草の反転は213・214型式と同じであるが、巻き具合が異なる。瓦面にはハナレ砂を使用。上外区を欠失するが、平瓦部凸面広端に入れたキザミが残る。頸部貼付により、裏面の補充粘土も厚く、段頸B II類をなす。全面に入念なナデ痕が残る。胎土は精良、焼成良好、瓦当面は灰白色を呈するが、たの部位は灰黒色で燃しが強い。

78は216型式、橋花を中心飾りとする均整唐草文で、唐草は3回反転する。第1・3単位の先端が分岐する。瓦当文は全体に肉厚な表現である。段頸B I類で、頸部貼付により瓦当を成す。平瓦凸面にヘラ削りの痕がある。他の部位はナデにより平滑に仕上げられている。胎土は精良、燃しが強く銀灰黒色を呈する。

79は217型式。繊細な表現の唐草文であるが全形は不明である。瓦面にハナレ砂を使用、段頸B I類で、各部ともヘラ削り後ナデで調整する。胎土は精良、焼成はやや甘く、暗灰褐色を呈する。

80は218型式、右半部の破片で、脇区は幅60mmと広い。中心飾りは不明、唐草は3回反転で、いずれも下から上へのびる。第1単位とその下の支葉の先端が2つに分岐する。段頸B I類で、頸部貼付による。細砂粒を多く含む胎土で、焼成は不良、茶褐色を呈する。

表3 軒丸瓦計測表1

表面調査番号	面	分	底	内		外		出土遺物		
				内 区 域	外 区 域	内 部 幅	外 部 幅			
1	120	共	213	100	36	7	39	8.35	DK SX-01	
2	121	*	120	100	25	8	37	8.23	*	
3	*	*	140	99	25	6	39	8.36	*	
4	*	*	99	25	7	8	39	8	*	
5	122	*	120	100	25	6	39	8.25	*	
6	*	*	147	100	25	6	39	8.36	*	
7	*	*	120	100	30	5	35	8.33	*	
8	*	*	98	25	7	8	39	8	*	
9	*	*	140	100	24	6	38	8.24	*	
10	不規	*		21	5	8	36	8	GK 焼成土	
11	*	*		27	6	8	32	8	GK 茶褐色土	
12	*	*		20	6	8	36	8	*	
13	*	*		5	8				DK SX-01	
14	*	*				*			GK 焼成土	
15	*	*		21	5	8	37	7	GK 焼成土	
16	*	*		5	8				DK SX-01	
17	*	*		25	5	8	32	8	*	
18	140	江	213	75	34	9-13	71	7.39	*	
19	*	*	140	72	34	15	9-13	88	8.27	DK SX-01
20	*	*	139	75	35	12	9-13	89	8.27	DK SX-01
21	不規	*		35	15	S	30	6	*	
22	*	*		33	14	S	29	7	*	
23	*	*		34	13	S	22	6	*	
24	*	*	145	79	33	12	5	30	7.28	*

表4 軒丸瓦計測表2

表面調査番号	面	分	底	内		外		出土遺物			
				内 区 域	外 区 域	内 部 幅	外 部 幅				
25	116	九	213	147	113	37	6	無	21 11 8.35	DK SX-01	
26	111	*		34	7	*	37	10	*		
27	150	古	213	145	101	*	32	8	30	△-E 頸部貼付無 止	
28	180	部分露重			38	12	3	15		GK 焼成土	
29	166A	古三巴文	134	74	30	11	9-15	19	7	0.39	DK SX-01
30	*	*	137	71	33	12	9-15	23	7	0.39	DK SX-01
31	*	*	141	73	34	13	9-15	23	8	0.39	DK SX-01
32	157	*		36	15	3	19	6	*		
33	不規	*		36	16	3	19	7	*		
34	*	*		34	14	3	20	6	GK 焼成土		
35	*	*		33	13	3	19	7	*	DK SX-01	
36	*	*		38	16	S	22	11	GK 開口少 ソリューション少		
37	166A	古三巴文	136	67	36	15	9-13	26	7	0.39	DK SX-01
38	*	*	141	67	37	15	9-13	32	4	0.39	*
39	*	*	140	65	37	12	9-13	35	6	0.39	GK 淡褐色土
40	*	*	139		37	18	S	19	6	0.37	DK SX-01
41	*	*	136	62	37	17	S	26	6	0.39	*
42	170A	*	147	71	36	19	5	19	7	0.39	*
43	不規	*		36	17	S	28	5	*		
44	179A	*	144	79	35	15	9-12	18	7	0.39	N-C H- 頸部 貼付無止
45	170C	*	145	62	42	17	9-15	25	8	0.34	*
46	不規	*		36	17	S	25	6	*	DK SX-01	
47	179B	*		37	15	S	22	6	*		

• S-珠文 KK-均整唐草文

• 外縁比=外区外縁幅×2/底径

• 空欄は不明

• 数値単位はmm

表5 斜平瓦計測表

実 測 図 番 号	型 式	瓦 当 部										頭の形態			出 土 遺 槽	
		上 弦 幅	弧 幅	下 弦 幅	内 区 厚	内 区 厚	上 外 区 文 様	下 外 区 厚	下 外 区 文 様	脇 区 幅	脇 区 文 様	文 様 深	直	曲	段	
48	200	231	24	225	37	20	KK	9	無	8	無	25	無	3		BI D区 SX-01
49	〃				36	20	KK	9	〃	7	〃	30	〃	3		〃
50	〃				37	21	KK	9	〃	7	〃	27	〃	3		〃
51	〃				33	21	KK	6	〃	6	〃	29	〃	3		〃
52	〃				36	21	KK	7	〃	8	〃	17	〃	3		〃
53	〃				35	20	KK	8	〃	7	〃	21	〃	3		〃
54	〃				37	21	KK	8	〃	8	〃	17	〃	3		〃
55	〃				31	20	KK	4	〃	7	〃		〃	3		〃
56	〃				38	21	KK	7	〃	10	〃	28	〃	3		〃
57	〃				37	22	KK	7	〃	8	〃	21	〃	3		〃
58	〃				35	24	KK	4	〃	7	〃	18	〃	3		〃
59	〃				36	22	KK	7	〃	7	〃	18	〃	3		〃
60	201				42	25	KK	11	〃	6	〃	26	〃	3		〃
61	〃				40	25	KK	7	〃	8	〃		4			D区 集石面
62	202				41	24	KK	10	〃	7	〃	51	〃	4		D区 SX-01
63	〃				40	24	KK	8	〃	8	〃	50	〃	4		E区 渋褐色土
64	〃				21	KK	9	〃	8	〃	43	〃	4		旧表土	
65	203				22	KK		〃	10	〃	22	〃	3		G区 雨落溝	
66	204				55	27	KK	18	〃	10	〃	30	〃	6		D区 SX-01
67	205					KK		〃	12	〃		〃	7			〃
68	206					27	KK	6	〃		〃		5			C区 深堀トレング整地土内
69	207					40	23	KK	10	〃	7	〃	6			D区 SX-01
70	208					45	25	KK	12	〃	8	〃	7			東面石垣裏込土
71	209					35	22	KK	9	〃	4	〃	57	〃		D区 SX-01
72	210						KK		〃	7	〃	37	〃	4		〃
73	211					41	26	KK	7	〃	7	〃	19	〃		C区 深堀トレング整地土
74	212					40	25	KK	8	〃	7	〃	19	〃		〃
75	213					39	23	KK	5	〃	11	〃	43	〃		D区 SX-01
76	214					36	23	KK	6	〃	7	〃	50	〃		〃
77	215					20	KK		〃	11	〃	48	〃	5		〃
78	216					43	22	KK	10	〃	11	〃		8		E区 渋褐色土
79	217					37	22	KK	8	〃	7	〃	52	〃		D区 SX-01
80	218					36	23	KK	7	〃	6	〃	58	〃		F区 渋褐色土

(c) 道具瓦・鰯・塙

隅木先蓋瓦

81は隅木先蓋瓦で、ほぼ全形をとどめる。隅木先瓦と蓋瓦が一体となった箱形のもので、上面奥部に茅負の隅角をいれるための三角形の切り込みがある。正面からみて、縦11.0cm、横20.5cm、奥行17.5cmの大きさで、三角形の切り込みは底辺20.5cm、斜辺12.0cmの二等辺三角形をなす。厚さは約2cmを測る。底面は空いている。側面の終端は内面に面取る。両側面のはば中央に径約0.8cmの釘穴を穿つ。平板な粘土板を4枚接合して全形を造る。各部ともナデで丁寧に仕上げ調整される。胎土は精良、灰白色を呈する。

鰯

82は鰯の鱗部断片。一方が平坦になっているので鱗部と判断した。ただし、胸鱗・腹鱗かの判別はできない。胎土は精良、黒灰色をなし、燃しが強い。

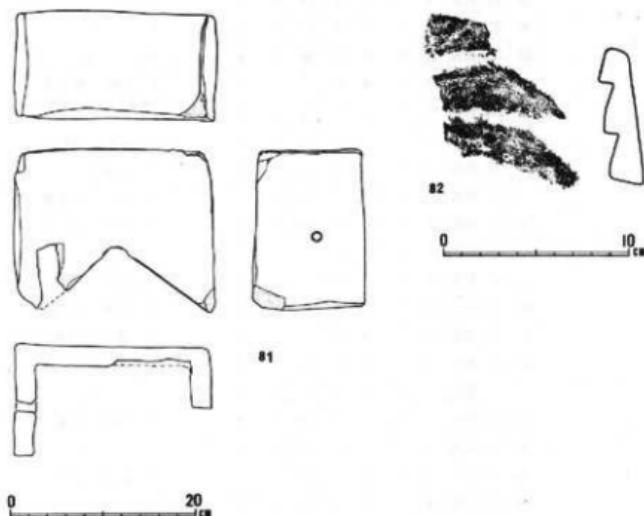


図29 道具瓦・鰯尾実測図 (81はS=1:6、82はS=1:3)

塙

82・83は塙の隅角部。一边の長さは不明、厚さは4.5~5.0cmである。ヘラ削り後ナデで平滑に仕上げる。精良な胎土で、燃しが強く銀黒灰色を呈する。

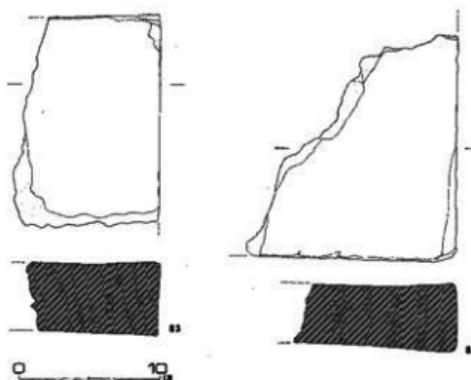


図30 土器実測図 ( $S = 1 : 4$ )

## (2) 土器類

1～5は土師器の皿であり、1・2・5と胎土・色調が類似し、口縁端に煤が付着する点も共通している。3・4は胎土・色調ともに類似するが、煤の付着は認められない。5の口径が9.4cmとやや小さいが、他は口径10.5～11.0cmの間に収まるほぼ同形・同大のものである。1・3・4の底部は丸みをもつが、2・5は平底である。いずれも体部内外面を強くナデで調整する。底部外面は不調整のものが多い。1・2・5の胎土はきわめて精良、色調は明茶橙色である。一方、3・4は微砂粒を多く含み、淡茶橙色を呈する。

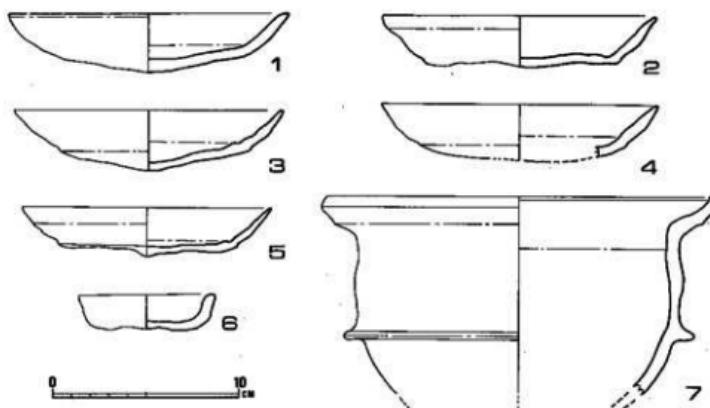


図31 土器実測図 I ( $S = 1 : 3$ )

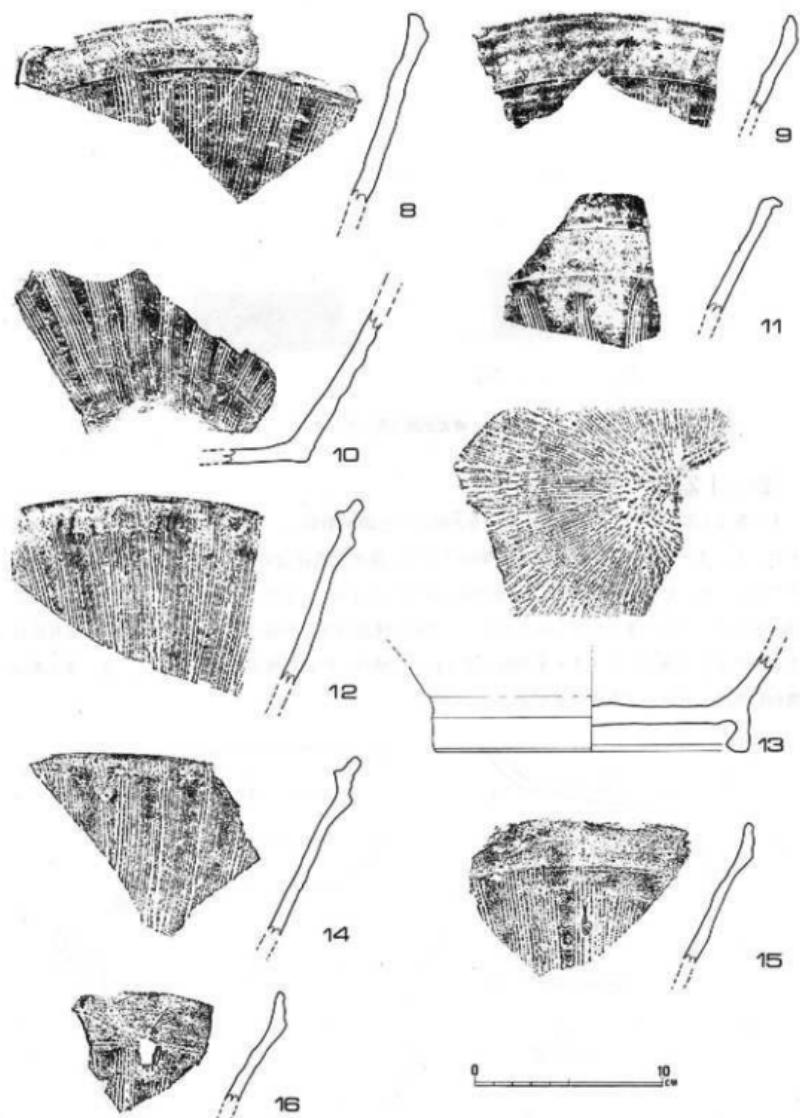


图32 土器実測図2 (S = 1 : 3)

6は、土師質の皿状の器で、口径7.4cm、器高1.9cmを測る。厚手で、手づくね様につくる。体部内面を強くナデるが、底部外面は不調整である。内面は橙色、外面は黄褐色を呈する。砂粒をきわめて多く含む胎土である。焼成窓の蓋と思われる。

7は土師質の羽釜。復原口径20.5cmを測る。口頸部はく字形に外反し、端部をはね上る。鉢の出は低く1cmほどで、厚みもあまりない。下半部に煤が付着する。鉢より下は、ヘラ削り後ナデで調整、上半部はヨコナデが主体であるが、頸部にヘラ状具の押圧痕があり、板状具でナデつけたようにも観察される。内面はナデてきわめて平滑に仕上げられている。胎土は精良、黄褐色を呈する。

8～16は摺鉢である。8・9・10、12・13・14、15・16がそれぞれ同一個体である。8・9・11・12・14～16は口縁部の破片で、8は内傾する口縁端面に幅広の凹線を廻らし、内面には6条/1.2cmのオロシメを施す。口縁端部内面はヨコナデである。9は直立する口縁外端面に一条の幅広でにぶい凹線をいれる。内面には8と同密度のオロシメがある。11の口縁端部はほぼ直角に短く外反しておわる。オロシメは6条/cmを1単位とする細かいものである。12・14の口縁端部内面には低い突堤があり、また、外面にも断面三角形を呈する突堤状のものが付く。オロシメは7条/2.3cmの荒いものである。15・16の口縁端部外面は直立し、幅広でにぶい凹線を2状廻らす。オロシメは14条/2.8cmと密である。10・13は底部。10は平底で調整は難、外面には粘土紐の凹凸が著しい。13は高い高台をもつもの。内面のオロシメは、底部中心の1点から放射状に施す。都合、4個体が確認される。12～14の個体には鉄釉が施されるが、他の3個体は素焼である。いずれも砂粒を多く含む胎土で、焼成は良好、欠き肌が著しい。確認される4個体すべて信楽焼である。

17は埋甕である。SD-01

より破片となつて出土した。  
復原口径約56cm、底径28cm、  
器高は52cmほどであろう。  
口縁端部が外横方に突出し、  
水平の面を成す。灰白色を  
呈し、焼成は甘い。内外面  
とも比較的平滑に仕上げら  
れている。

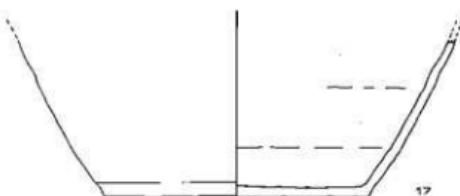
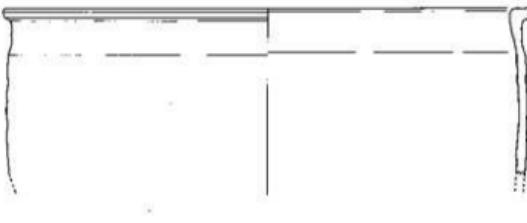


図33 土器実測図3 (S=1:6)

### (3) 石造物

郡山城の石垣、あるいはその裏込め石などに多数の石造物（墓石・石仏等）が使用されていることは従来よりよく知られていたが、今回の調査では小形五輪塔をはじめ数例の出土例があつた。ここでは、隅櫓部の礎石<sup>q</sup>の東側で出土した墓石について報告する。いわゆる板状五輪塔で、上半部を欠いている。下半部は荒く割り欠いた調整が残る。火輪の下半部から水輪・地輪の部分が遺存する。地輪には「道善」と刻むが、他に文字や種字は無い。



図34 石造物実測図 ( $S = 1 : 6$ )



写真3 板状五輪塔

## 第4章 総括

今回の調査に伴う検出遺構について、箇条書きにまとめておく。

①東隅櫓の規模は梁行約6m、桁行約7mである。

②続櫓は東隅櫓に付属する建物で、規模は東隅櫓とほぼ等しい。

③東面多聞櫓の梁行は約5mである。

④南面多聞櫓の梁行は約5mであり、北側に小礎石列を伴う。

⑤隅櫓と続櫓には最低2時期にわたる変遷がみとめられる。

⑥古い時期（第Ⅰ期）のものは、隅櫓と続櫓の北側及び西側に高さ約60cmの石積みを伴い、多聞櫓との接連部に比高差をもつ。ただし、この時期に南面多聞櫓が伴なったかどうかは確認していない。

⑦新しい時期（第Ⅱ期）のものは、西側の石積みを埋めて段差を無くし、南面多聞櫓を付設し、さらに、石組暗渠を設置した時期のもである。

⑧Ⅰ期とⅡ期の時期については確定使用を得ていない。ただ、SX-01が南面多聞櫓の下部にまで伸びており、かつ、このSX-01から花菱文軒丸瓦が出土していることを考えると、柳沢氏入部以後に第Ⅱ期の建物が成立している可能性が強い。

以上のように、遺構の時期的な変遷には、不明な点を多く残しており、今後の調査に委ねる部分も多い。

一方、隅櫓の変遷を知る上で重要な資料に郡山城関係の絵図面がある。絵図からは細かい点は読み取れないが、大方の構造変遷が判明する。特に隅櫓に続櫓が付属して描かれている場合とそうでない場合があり、この点が注目されると思う。ただ、今回の調査では続櫓部の詳しい断割り調査を行っていないので、考古学的検討は不可能であることを断っておきたい。さて、城絵図の中で制作年代の判明するものは11例ある（表6）。この内、特に信頼性の高いものが現在国立公文書館内閣文庫が所蔵する「和州郡山城絵図」である。いわゆる正保絵図と汎称されるこの絵図は、幕府の勅命により作成されたもので精度は高い。この絵図では、続櫓は描かれていない。一方、天理大学附属天理図書館が所蔵する「和州郡山御城之図」は、池上為淳作とされるもので18世紀末～19世紀初頭の制作にかかるものである。ここでは、明瞭に続櫓が表現されている。また、幕末の「安政年間和州郡山藩家中図」（財団法人柳沢文庫蔵）には描かれていない。このように、幾度かの構造変遷があるようだが、もともと絵図に描かれた建物はデフォルメが著しく、慎重な検討が要求されるものである。また、「和州郡山城御城之図」では続櫓は描かれているものの、大きさ等に関しては東面多聞櫓の一部として計測されている例ものがあるのでさらに注意が必要である。絵図面との比較対比は今後の課題としておきたい。

一方、制作時期は不明であるが、柳沢文庫の所蔵史料の中に、今回の検出遺構と同じ表現をと

るものがある。図35は、建國で描くもので、続櫓の表現がある。図36は指図であるが、隅櫓とほぼ同じ規模の続櫓が明確に表現されている。この二つの絵図は検出遺構の状況とほぼ同じであり、注目される。ただ、制作年代が不明である点が惜しまれるが、検出遺構の年代を考慮する上で今後十分な精査が望まれよう。

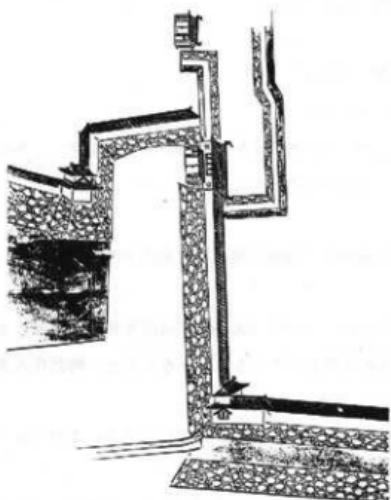


図35 (財)柳沢文庫所蔵郡山城古図(上が西)

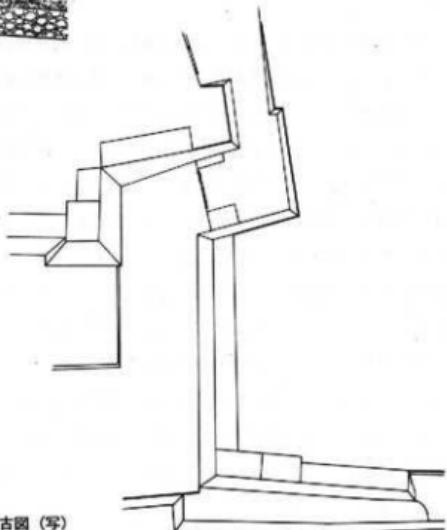


図36 (財)柳沢文庫所蔵郡山城古図(写)

表6 郡山城絵図一覧

番号	名 称	年 代	所蔵機関	概 要	
1	和州郡山城絵図	正保年間	1639年 1671年	国立公文書館 内閣文庫	幕府の勅令により作成されたゆわゆる正保絵図であり、精度はさわめて高い。堀・土居・道・水路等を色分けする。道路・堀には細長が記される。町家・侍町の区別はあるが、武士名は記入されない。寺社では洞泉寺のみ記入される。城郭中堅部の表現も精緻であるが、門・櫓名はない。「本多内記」は寛永16年入部の本多政勝をさす。325×351cmの大図。
2	(郡山城古図)	延宝6年以降	1678年以降	側柳沢文庫	標題はない。「慶長十七年三月」の写しとするが、「出雲守」。「肥後守屋敷」の記述から本多時代の延宝6(1678)年以後と考られる。屋敷数・寺社地を示すが、氏名・寺社名はない。
3	(郡山城古図)	タ	タ	楠 本 氏	標題はない。土居・道・町屋・寺・堀に色分けする。寺社名・町名のほか、武士名の記入がある。城郭中堅部の表現は粗拙である。武士名は(?)と共にものがあり、本多時代のものと推定される。
4	郡山城内外壁測量図	貞享2年頃	1685年	発 志 院	標題は後記。堀・土居・道・町屋・寺・堀に色分けする。堀の長さ・幅の明記な記入がある。
5	和州郡山城図	元禄年間	1688年 1703年	国立公文書館 内閣文庫	侍屋敷・堀・土居・寺・町屋を色分けする。寺名・町名はあるが、武士名などは記入されない。堀の記入はあるが、建物名はない。79×82cm
6	(郡山城古図)	享保9年	1724年	側柳沢文庫	標題はない。「享保九年辰二月」の年紀があり、柳沢氏八郎当時のものである。土居・堀・道・内町・外町・寺社・侍屋敷に色分け。侍屋敷には武士名が記されるが、弘化5年の加筆である。堀名はない。
7	大和国添下郡 郡山町地図	宝曆5年	1755年	国立公文書館 内閣文庫	本多時代の絵図を宝曆5年に模写したもの。堀・土居・町屋・侍屋敷等を色分ける。町名の他、武士名も一筆ごとに記入する。城の表現は粗拙で、堀名などはない。77×78cm
8	和州郡山御城之図		18C末 19C初	天理大学附属 天理図書館	郡山藩士池上為淳作。文化2(1805)年に81枚、18C末ごろの作図と思われる。中堅内を詳細に描く。郭・堀・門名の記入はもちろん、各々の洋歌・横歌も記載。門・堀・堀には恩・鉄砲腰間・矢張間の数も記す。精度は高い。
9	安政年間 和州郡山藩家中國	安政年間	1854 1859年	側柳沢文庫	星敷・辻番・寺社・土手・川・道・牛糞地・町に色分け。寺社名・町名の他、武士名も一筆ごとに記入する。堀の記入があり、また、窓高・門・櫓の数などの細かい記入がある。
10	大和国郡山城 橋多聞井石垣預所見	慶応元年	1864年	側柳沢文庫	見砂門曲輪の東面石垣が崩壊したとき、幕府に提出した修理願書の控図である。中堅内のみ表現する。細かな記入はないが、門・櫓などの建造物は詳細に描かれる。
11	郡山御城之図	幕末		長谷 部 家	版画。版本が残っている。名所巡りの表現である。
12	(郡山城古図)	享保9年前	1724年以前	淨 照 寺	町名・寺名の記入あり。色区分もある。永慶寺地が「法光寺」となっているので、享保9年より以前のものと推定される。

○本表は、奈良国立文化財研究所・御園境事実調査研究所編『大和郡山市・城跡及び旧城下町等の保存と活用のための構想策定調査'81』(1981年)、南村俊一『石造物郡山城跡軒用材調査概要』(1975年)を基に作成した。

○上記以外に、財團法人・宗教法人・個人所蔵のものが数点存在するが、原本を精査していないので省略した。

次に出土瓦についてまとめておきたい。今回の調査による出土瓦の中で特徴的なものは、藩主の家紋を主なモチーフとするいわゆる文所紋軒丸瓦である。郡山城の歴代城主の変遷については、文献からほぼ明らかにされており、各々に対応する文所紋瓦が比定できれば、年代判定の基準資料として使用でき、今後十分活用できる見込みがある。南村俊一氏によれば（南村俊一『石造物郡山城址転用材調査概要』1975年、財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会発行）、

裏葉付十二弁菊花文	豊臣家
左三巴文	増田家
九曜文	大久保家
沢鷦文	木野家
酢漿草文	松平家
立葵文	本多家
花菱文	柳沢家

に各々比定できるという。この内、水野以降の比定については問題はないと思われるが、他については、今後再検討の必要があると考える。

さて、今回出土した軒丸瓦の内訳は下記の通りである。

九曜文	2点 (5%)
沢鷦文	17点 (36%)
立葵文	7点 (15%)
右三巴文	8点 (17%)
左三巴文	11点 (23%)
花菱文	1点 (2%)
複弁蓮華文	1点 (2%)

総数48点

沢鷦文が目立つが、他の瓦もまんべんなく出土している状況があり、どのように軒丸瓦が使用されていたのか不明な点が多い。特に文所紋瓦については、城主の交替のたびに葺きかえたものかどうか、いろいろと問題があるので今後の検討に委ねておきたい。

軒平瓦には多くの型式がある。また、どの軒丸瓦と組み合うものなのかまったく不明である。この内、67(図27)の資料が古い様相をもつものとして留意される。また、今回は出土していないが、図37に示す軒平瓦も初期の郡山城(豊臣)に伴うものと推定されてきたものである(図37資料は市教育委員会保管資料、出土地等詳細は不明)。軒平瓦についても不明な点ばかりであり、今後に委ねておきたい。



図37 軒平瓦拓影 (S=1:3)

以上、若干の総括を行ったが、文字通り課題を山積みにしたのみで、明らかになった点はあまりにも少ない。今後、郡山城の実態を十分解明してゆく必要があるが、この点は若い世代に託しておきたい。

#### 参考文献

- ・柳沢文庫専門委員会編『大和郡山市史』1966年、大和郡山市
- ・南村俊一編『石造物郡山城址軸用材調査概要』1975年、財団法人都山城史跡・柳沢文庫保存会
- ・奈良国立文化財研究所・柳環境事業計画研究所編『大和郡山市・城跡及び旧城下町等の保存と活用のための構想策定調査'81』1981年、大和郡市教育委員会
- ・奈良市教育委員会編『多聞庵城跡発掘調査概要報告』1979年、奈良市教育委員会
- ・奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年、西大寺
- ・小林謙一、佐川正敏「調査報告1—法隆寺出土古瓦の調査速報(2)—平安時代～近世の軒丸瓦」（法隆寺昭和賛財帳編纂所編『伊河留我—法隆寺昭和賛財帳調査概要報10—』）1989年、株式会社小学館

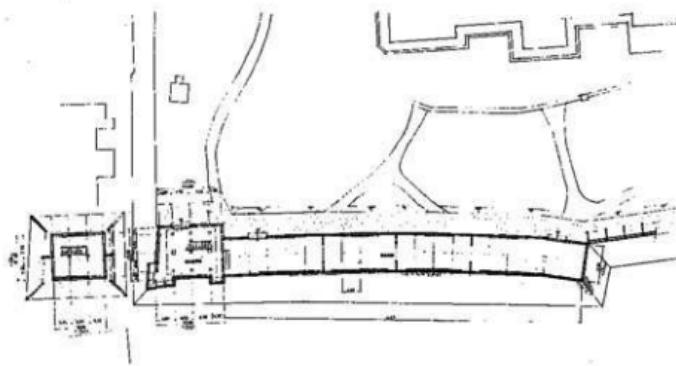


図38 復原建築設計図1 (平面図抜粋・S = 1 : 650)

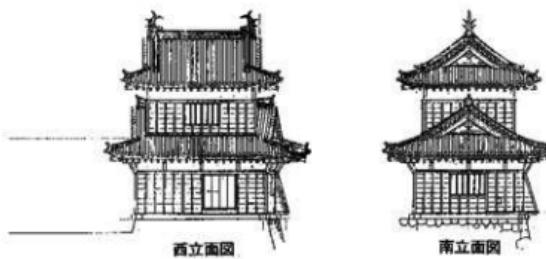


図39 復原建築設計図2 (東隅橹立面図抜粋・S = 1 : 650)

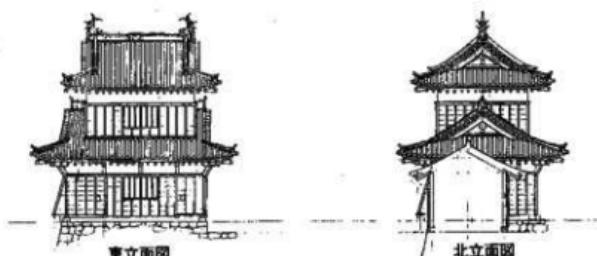


図40 復原建築設計図3 (東隅橹立面図抜粋・S = 1 : 650)

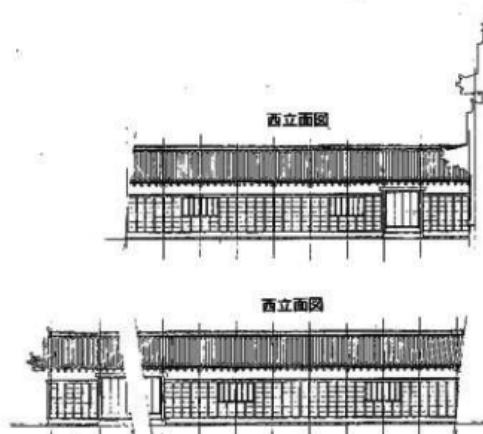


図41 復原建築設計図4（多間格立面図抜粋・S = 1 : 650）

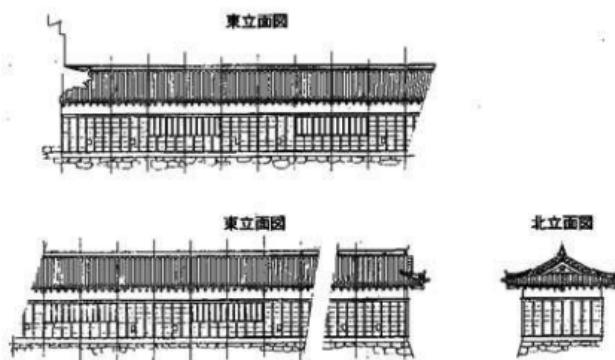
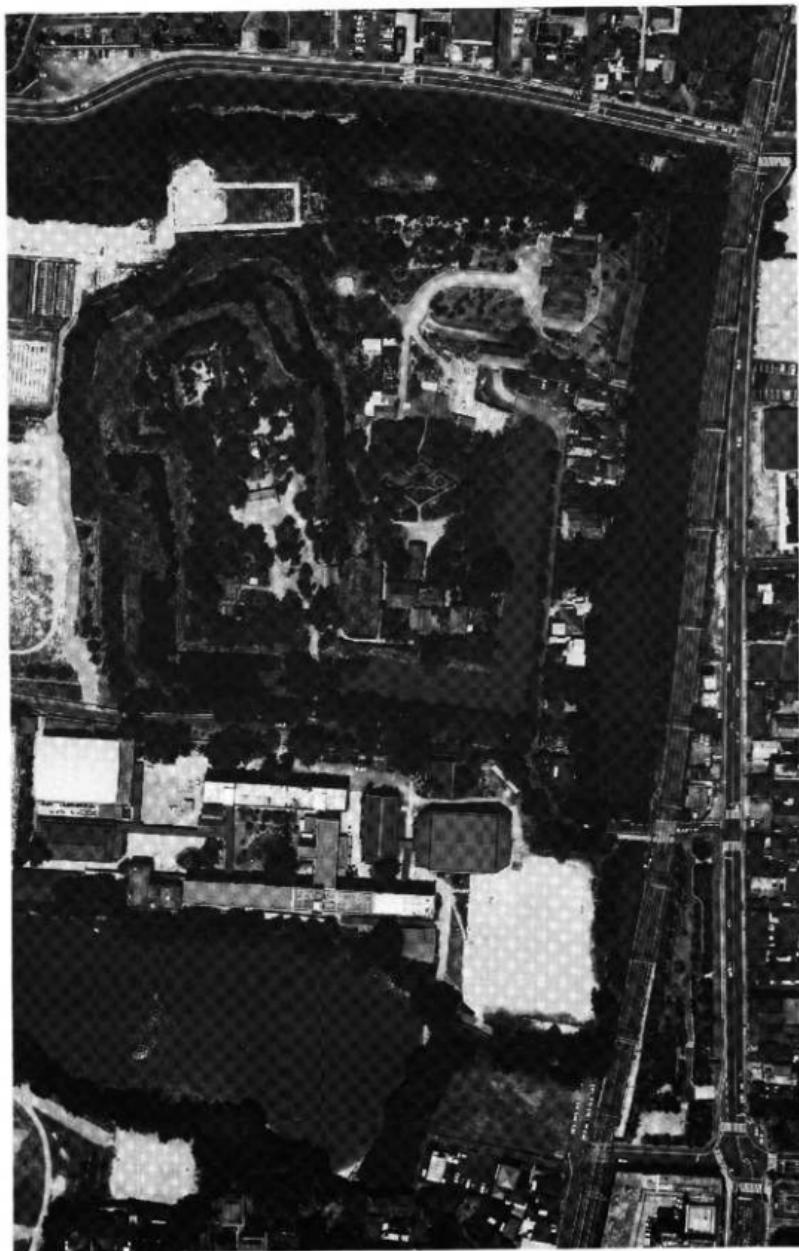


図42 復原建築設計図5（多間格立面図抜粋・S = 1 : 650）

# 図 版



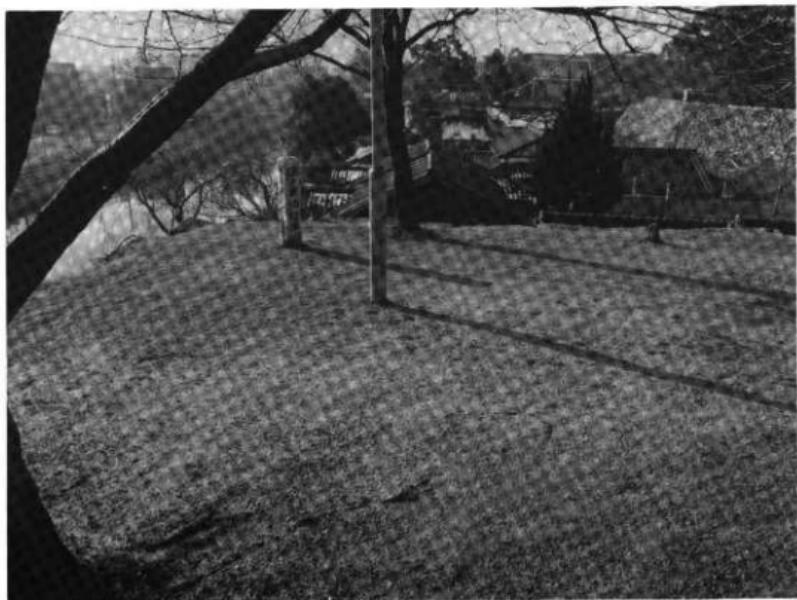
郡山城跡空中写真（南上空から）



郡山城跡空中写真（真上から・上が北）



調査地遠景（東から）



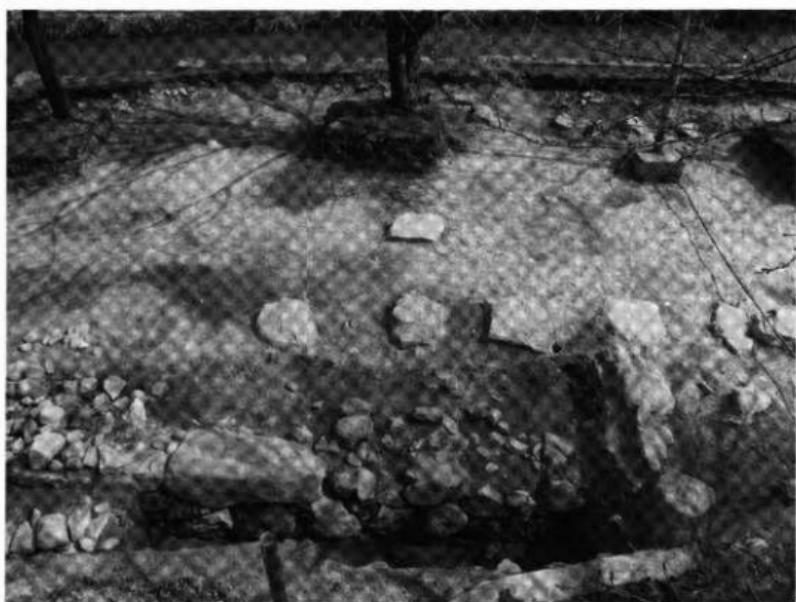
調査地前景（北から）



調査地前景（北から）



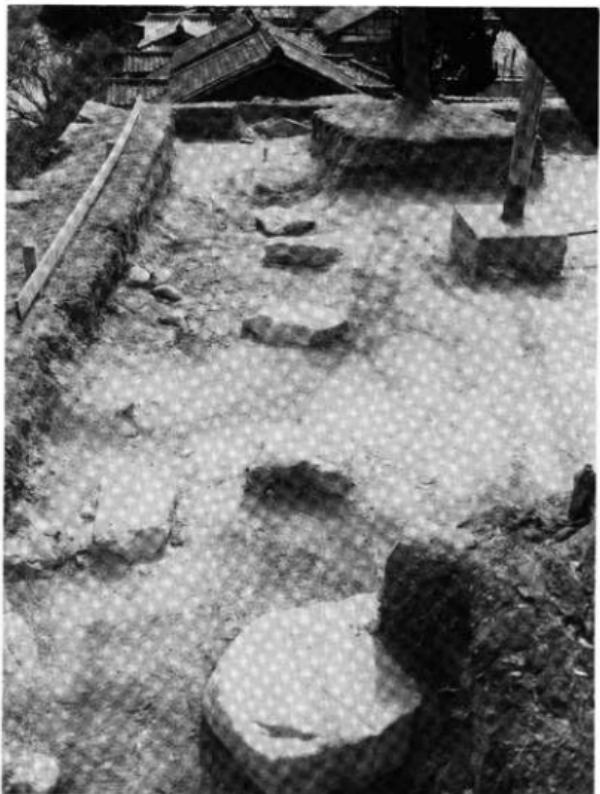
石積全景（北西から）



隔柵・続柵全景（西から）



隔柵東壁石列（北から）



隔櫓東壁石列（北から）



隣接細景（北西から）



隣接西端部の状況（北から）



続櫓西端の集石（東から）



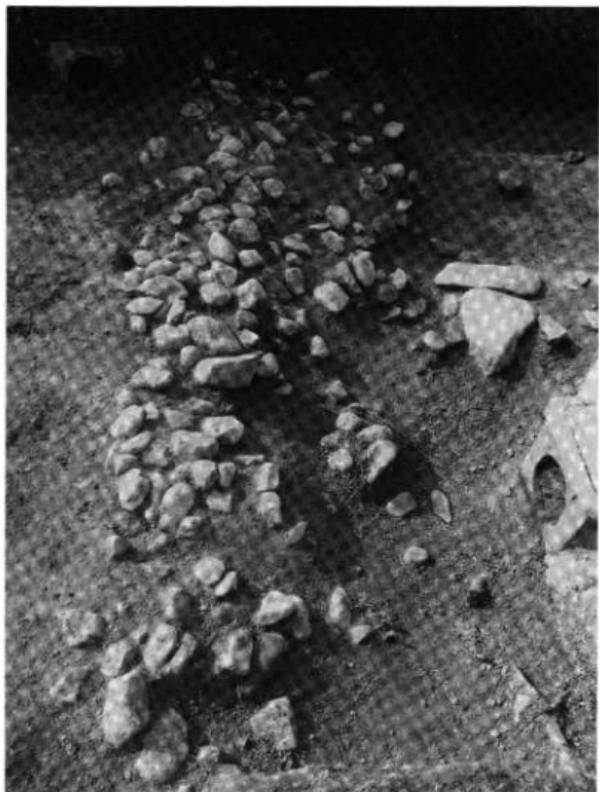
続櫓東面石垣の裏込め石（西から）



続権・多聞権の境界部（北から）



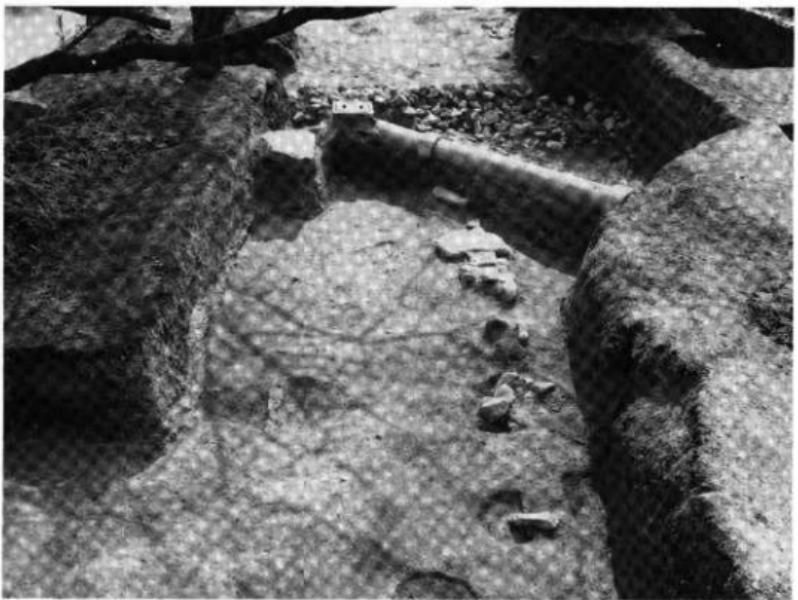
続権・多聞権の境界部（西から）



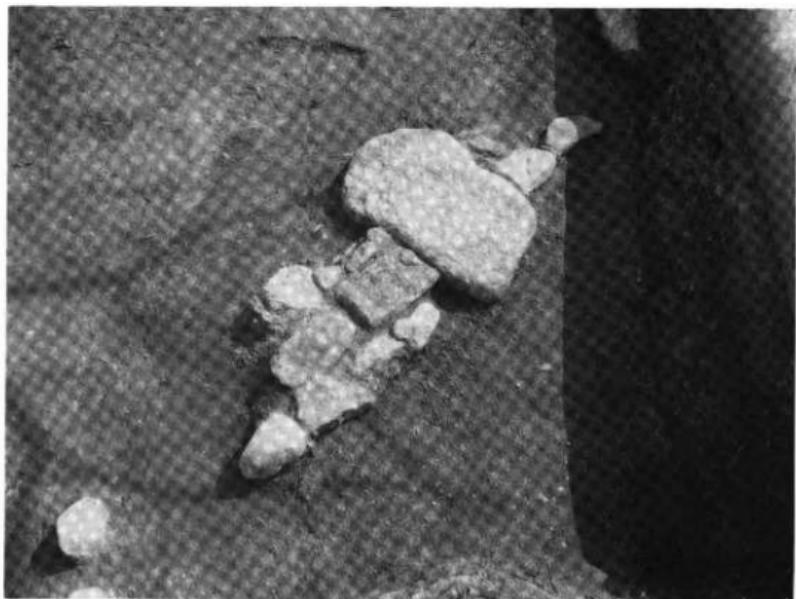
統槽・多聞槽の境界部（東から）



多聞捨南半部（B区）全景（北から）



多聞捨南半部（B区）近景（北から）



多聞櫓の礎石（北東から）



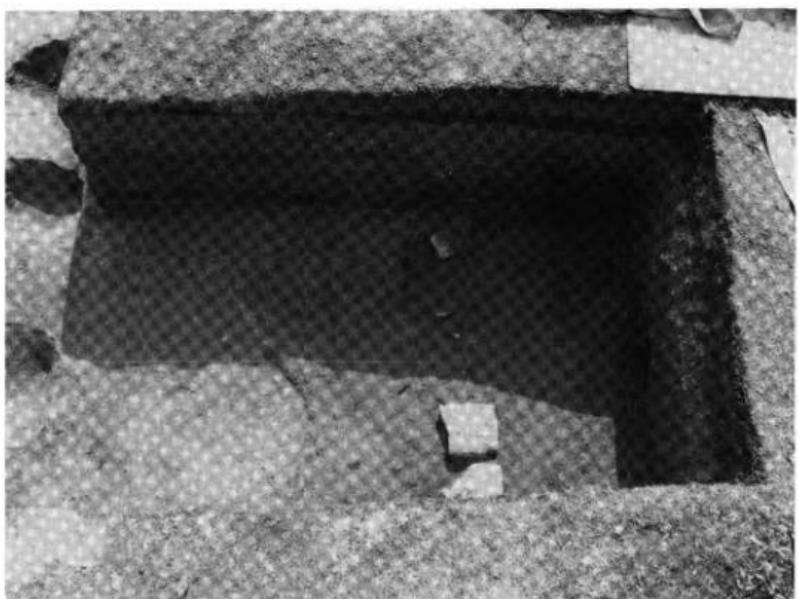
多聞櫓北半部（C区）全景（北から）



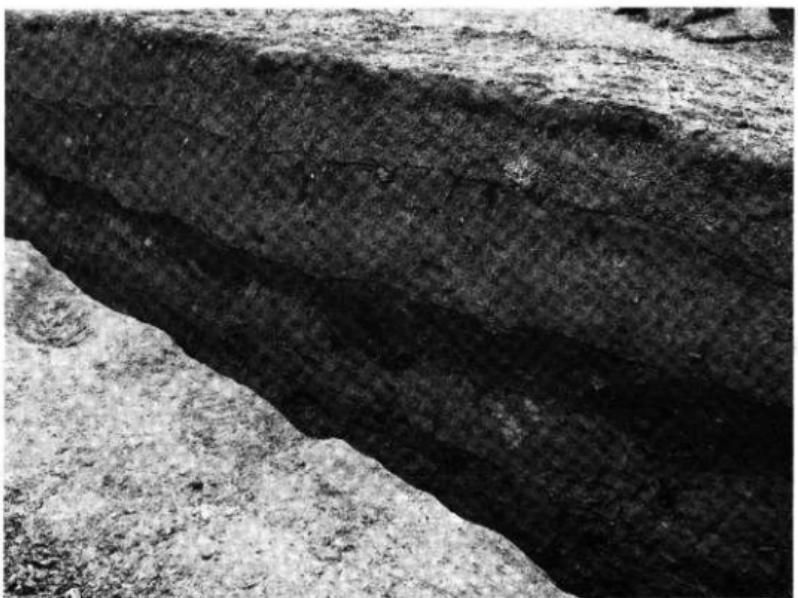
E区全景（北から）



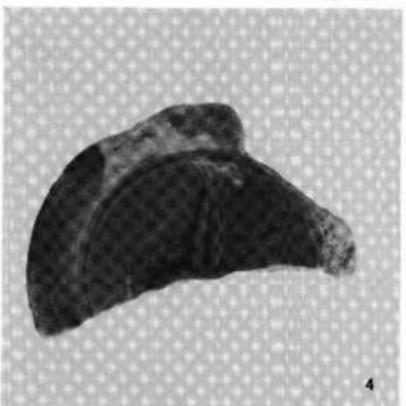
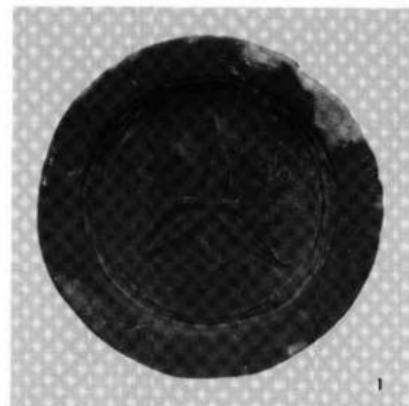
E 区石組暗渠（南から）



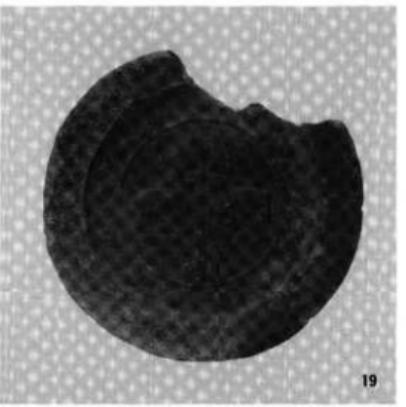
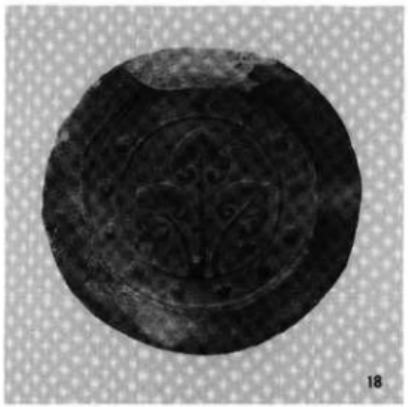
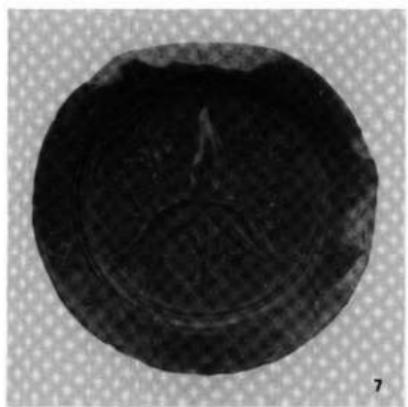
H区全景（北から）



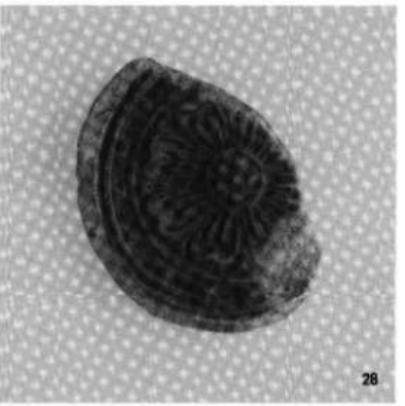
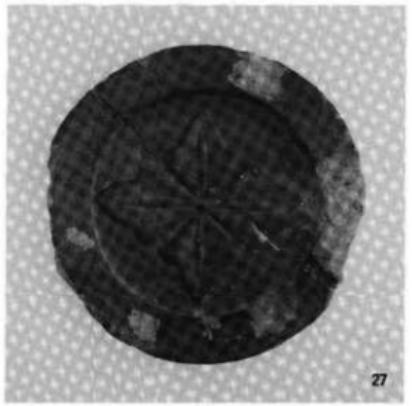
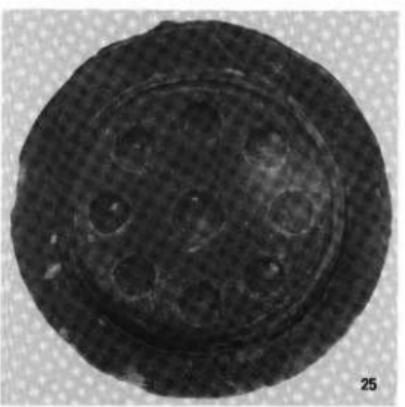
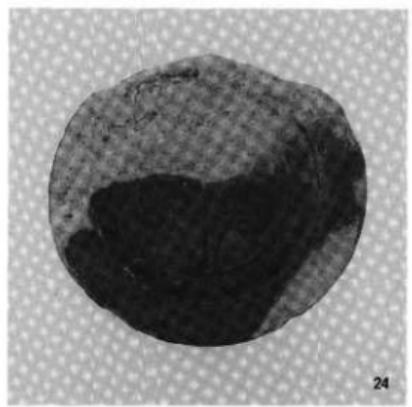
盛土の状況（北東から）



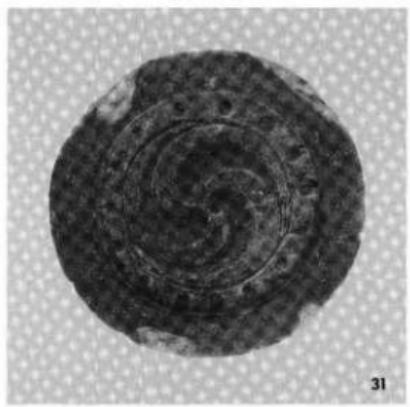
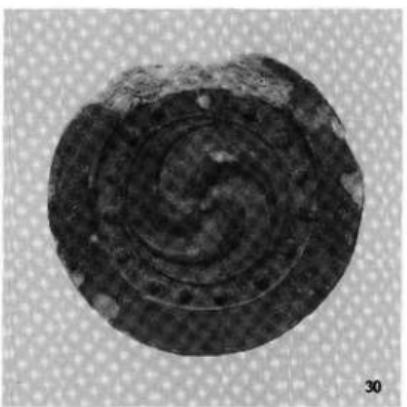
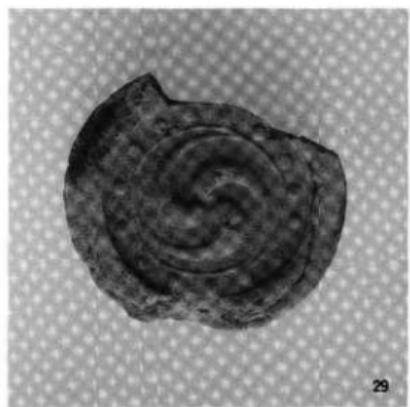
沢宮文軒丸瓦（以下、番号は実測図番号に対応）



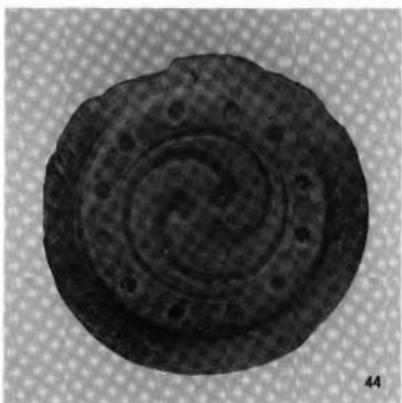
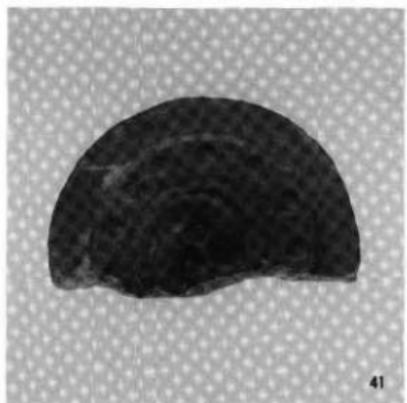
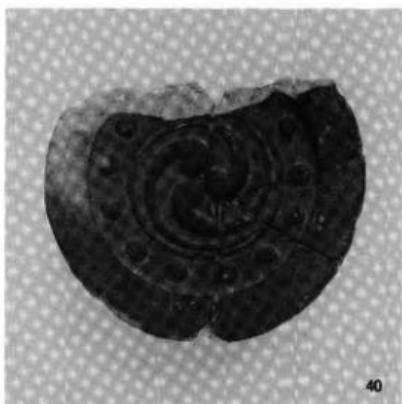
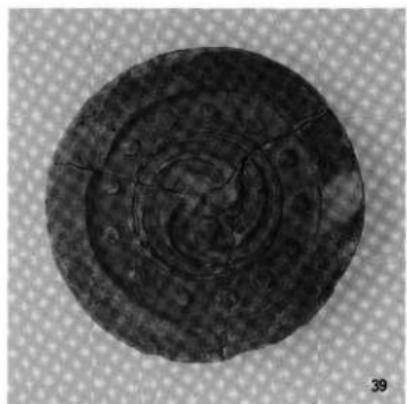
沢瀉文・立葵文軒丸瓦



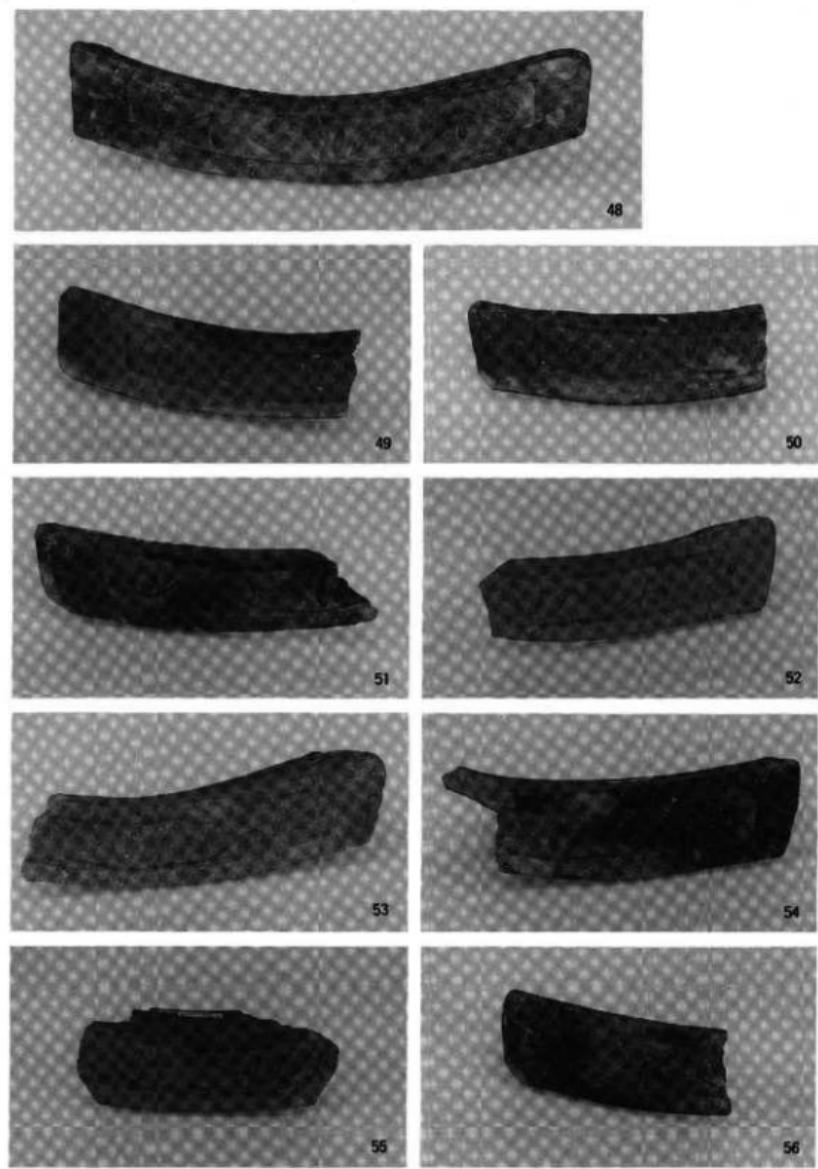
立葵文・九曜文・花菱文・複卉蓮華文軒丸瓦



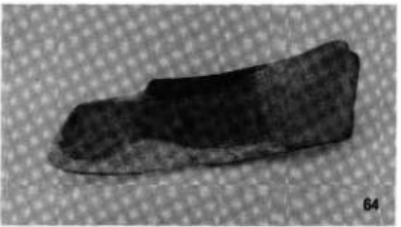
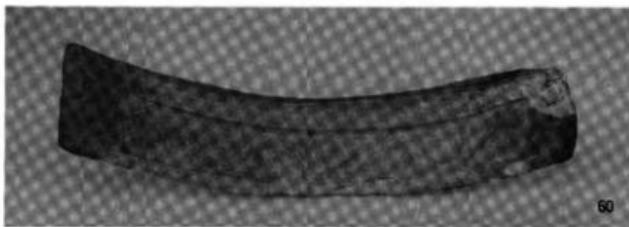
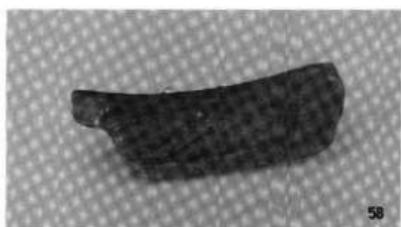
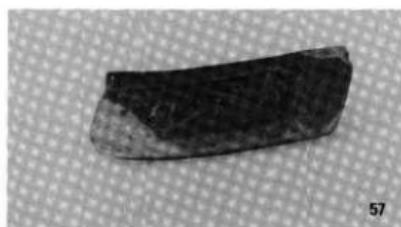
右三巴文・左三巴文軒丸瓦



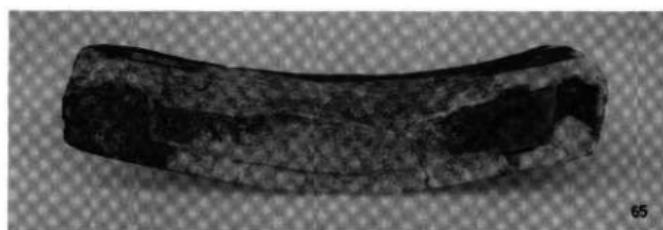
左三巴文軒丸瓦



軒平瓦



軒平瓦



65



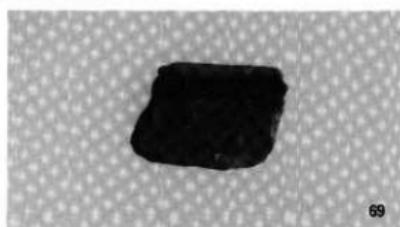
66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77

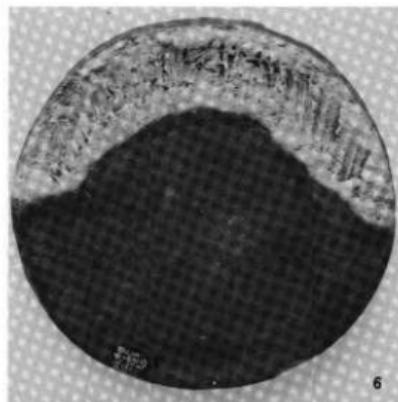


78

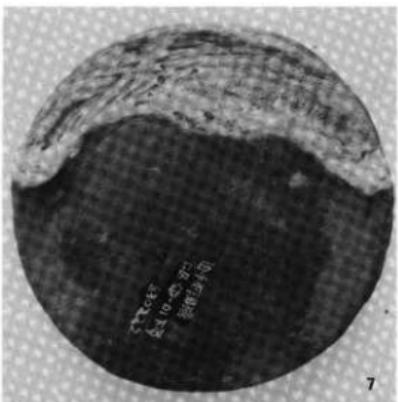


79

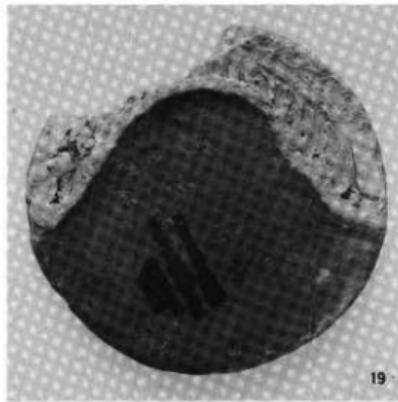
軒平瓦



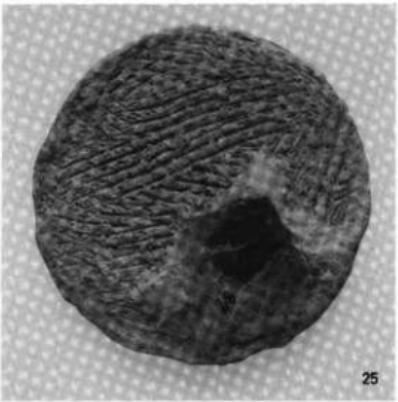
6



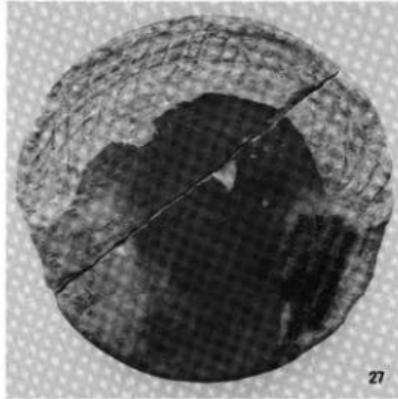
7



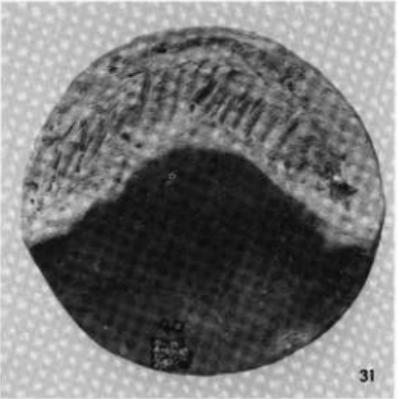
19



25

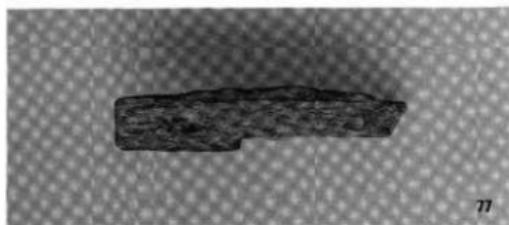


27

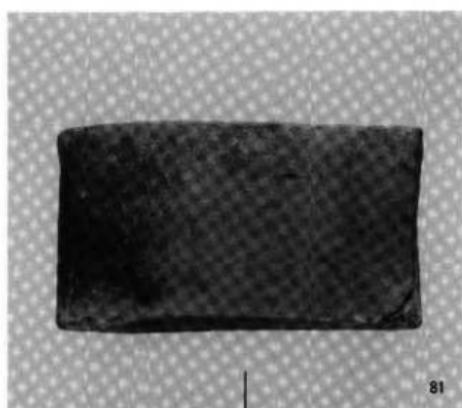


31

軒丸瓦の接合痕



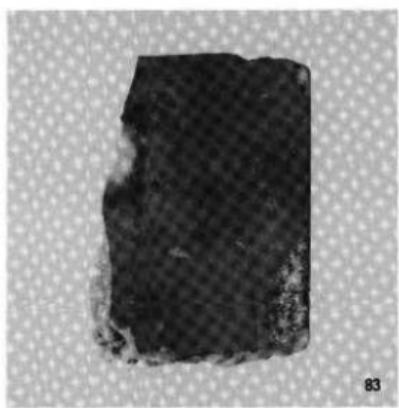
軒丸瓦・軒平瓦の接合痕



82



83

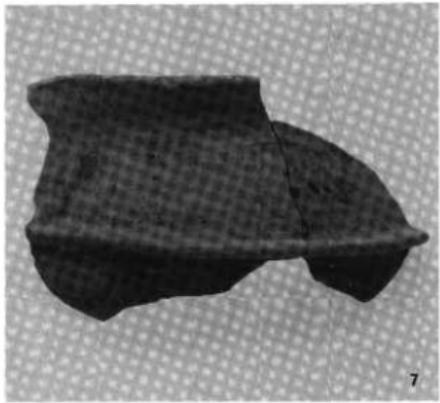
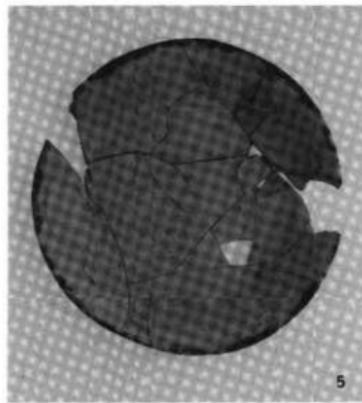
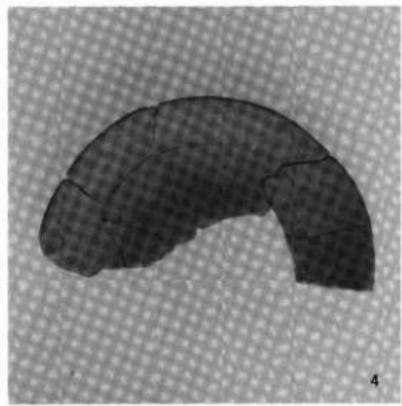
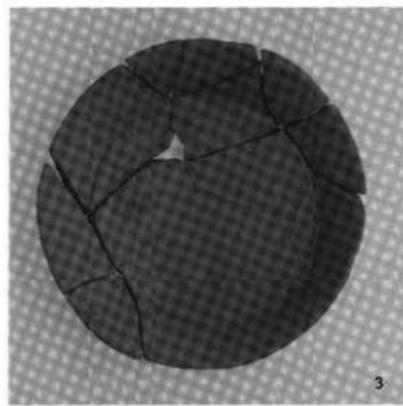
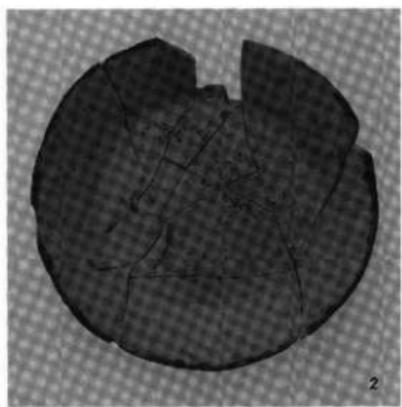
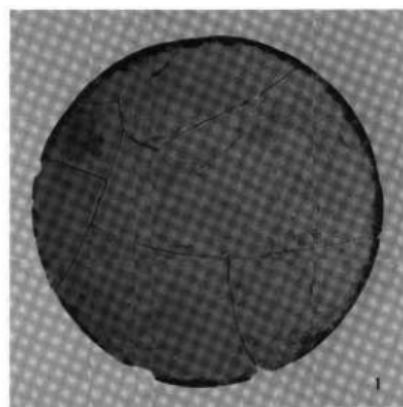


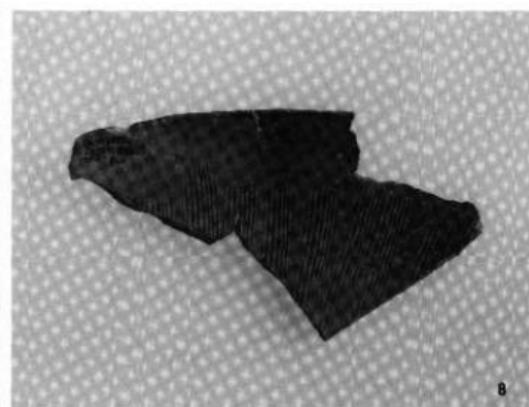
83



84

隔木先蓋瓦・號・塊





6

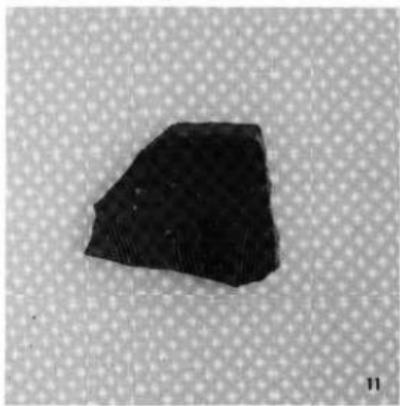
8



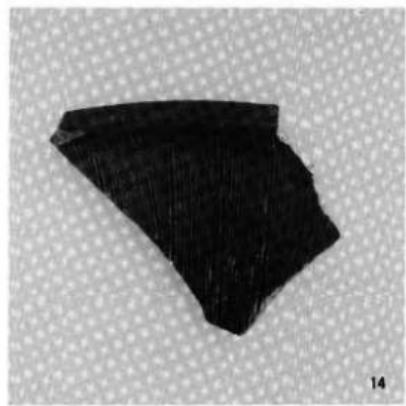
9



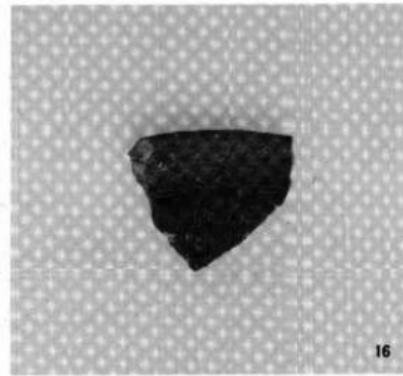
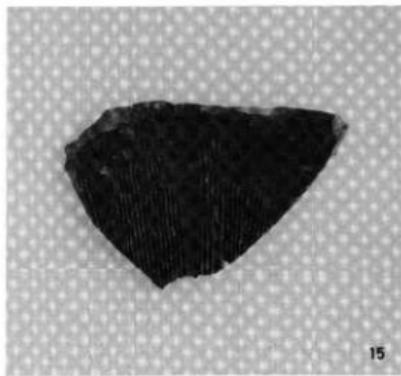
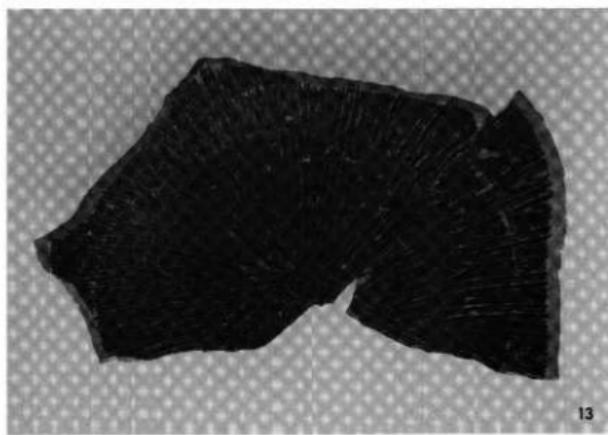
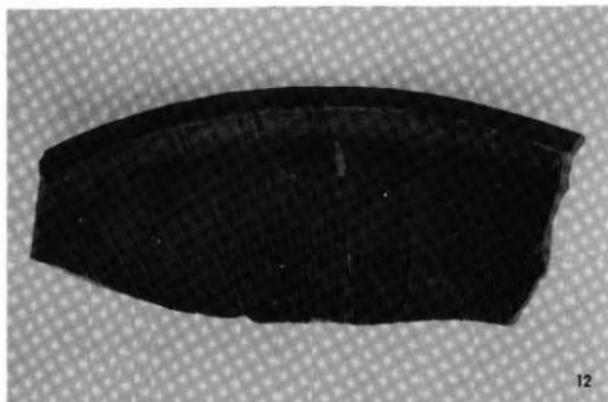
10



11



14



**大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集**

奈良県大和郡山市城内町

郡山城跡第7次

追手東隅櫓・多聞櫓跡発掘調査報告書

平成5年9月30日

編集行  
大和郡山市教育委員会  
著作権所有  
大和郡山市北郡山町248-4

印刷  
共同精版印刷株式会社  
奈良市三条大路2丁目2番6号